新潟市小丸山遺跡発掘調査概報

大江山中学校より遺跡を望む（1986年6月）

1987

新潟市教育委員会

序

当市は、信濃川・阿賀野川の河口に位置し、古くからこの両大河の恩恵を受けて栄えてまいりました。古代史でよく知られております、渟足の柵・蒲原の津などもこの河川の利を背景に成立したものといわれております。しかし、古代の新潟の姿はあまりよく判っておらず、渟足の柵・蒲原の津の所在地もはっきりとしていません。

小丸山遺跡は、当市では赤塚地区と並んで、古代の遺跡が最も多く残されている大江山地区にある平安時代の遺跡です。この遺跡の調査は、当市にとって初めて経験する大きな発掘調査となりました。未経験のためとまどうこともありましたが、幸い、新潟県教育委員会の格段の御指導を得ることにより、予想を超える成果を得て調査を終えることができたと思います。

本書で報告する内容は、まだ整理が終っていないため概略的なものでありますが、郷土の古代の姿を明らかにする一助となれば誠に幸いであります。

おわりに調査の実施を快く御了承いただいた新潟県住宅供給公社、調査に際し惜しみない御協力をいただいた地元の方々をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和62年３月

新潟市教育委員会
教育長　寺崎哲夫

例　言

1　本書は新潟市直り山字小丸山ほかに所在する小丸山(こまるやま)遺跡の発掘調査の概報である。

2　調査は、新潟県住宅供給公社の分譲住宅団地建設に伴う事前調査として、同公社から新潟市が受託し、新潟市教育委員会が調査主体となって実施した。調査体制は目次の末尾に記した。

3　出土遺物は、新潟市教育委員会が一括して保管している。遺物の注記はＫＭとしてある。

4　本書には、範囲等確認調査で得た資料のうち遺構に伴うもの、及び調査地東隣り排水路整備工事の立合調査で得た資料を合せて掲載した。

5　調査結果は現在整理途上にあるため、本書は遺構を中心に特徴的な資料の報告に止めた。

6　方位は真北、レベルは標高を示した。真北は磁北から東偏７度20分とした。土器の断面は土師器・磁器を白抜き、須恵器を黒塗り、陶器を網点で示した。拓影図で内面・外面両面を掲げたものは、断面の右を外面、左を内面とした。測図の縮尺は目次に記した。

7　遺物の写真は、図版８を除き、測図のあるものは測図と同じ番号を付し、測図のないものは、出土遺構名・出土グリッドを付した。

8　地形図のうち、第２図・第３図は新潟市所有の基本図を用いた。

9　本書の執筆ならびに写真・実測図の作成等は小池・藤塚・渡邊が共同で行い、戸根富美江が補助をした。編集は藤塚が担当した。

10　調査から本書の作成に至るまで、多くの方々・機関から協力・指導を得た。

目　次

序
例　言
Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　遺跡の位置と周辺の環境……1
1 位置と地形……1
2 周辺の遺跡……2
Ⅲ　調査の概要……3
1 調査区の設定……3
2 調査の方法と経過……3
3 層　序……5
4 遺跡の概要……6
Ⅳ　おもな遺構と遺物……6
1 縄文時代……6
2 平安時代……7
a 建物……7　b 井戸……10　c 溝……13
d 土坑……14　e おもな遺物……14
3 中　世……16
4 近世以降……16
a 遺構……16　b 遺物……17
Ⅴ　まとめ……17
参考文献……17

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置と周辺の地形概念　(1：20万)……1
第2図　周辺の遺跡分布　(1：20,000)……2
第3図　遺跡周辺の地形　(1：5,000)……3
第4図　現地形測量図・グリッド設定図　(1：1,500)……4
第5図　基本層序　(1：50)……5
第6図　縄文時代遺物　(1：2)……6
第7図　SE1　(1：40)……10
第8図　SE2　(1：40)……10
第9図　SE3　(1：40)……10
第10図　SE4　(1：40)……11
第11図　SE5　(1：40)……11
第12図　SE6　(1：40)……12
第13図　SE7　(1：40)……12
第14図　SE8　(1：40)……12

第15図　ＳＥ９　（１：40）……13
第16図　ＳＫ１　（１：40）……14
第17図　ＳＫ２　（１：40）……14
第18図　ＳＫ５　（１：40）……15
第19図　平安時代遺物１　（１：３）……15
第20図　ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ３　（１：100）……18
第21図　ＳＢ４・ＳＢ７・ＳＢ８　（１：100）……19
第22図　ＳＢ５・ＳＢ６　（１：100）……20
第23図　畝状小溝ほか　（１：100）……21
第24図　ＳＢ12・ＳＤ３・ＳＤ４セクションほか　（１：40）……22
第25図　ＳＢ９・ＳＢ10・ＳＢ11・ＳＢ12ほか　（１：100）……23・24
第26図　平安時代遺物２　（１：４）……25
第27図　平安時代遺物３　（１：４）……26
第28図　平安時代遺物４　（１：４）……27
第29図　平安時代遺物５　（１：３・１：４）……28
第30図　平安時代遺物６・近世遺物　（１：３・１：４・１：10）……29
第31図　ＳＥ９井戸枠　（１：６・１：20）……30
第32図　平安時代遺構配置図　（１：600）……巻末
付図　小丸山遺跡遺構全測図　（１：200）

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景　基本層序　調査区の景観１
図版２　調査区の景観２　ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ３　ＳＢ11Ａ・ＳＢ11Ｂ・ＳＤ３
図版３　ＳＢ12・ＳＤ４　ＳＥ５・ＳＥ７・ＳＥ９
図版４　縄文土器・中世陶器・砥石・羽口・鉄製品・土錘
図版５　平安時代遺物（土器１）
図版６　平安時代遺物（土器２）
図版７　平安時代遺物（木製品１）
図版８　平安時代遺物（木製品２）
裏表紙　墨書土器

調　査　体　制

調査主体　新潟市教育委員会（教育長　寺崎哲夫　次長　丸山哲男）
総　　括　鈴木忠（社会教育課長）　細川仁（社会教育課長補佐）
調査担当　藤塚明（社会教育課主事）
調 査 員　坂井陽一（新潟江南高教諭）　酒井和男（新潟県文化財保護指導員）　戸根与八郎（新潟県教育庁文化行政課主任）　寺崎裕助（同文化財専門員）　小池邦明（社会教育課嘱託）　渡邊朋和（同）
事　　務　松岡道彦（社会教育課主事）　古井弘（同）　熊谷博純（同）
調査作業　阿部慶子　阿部フミ子　五十嵐カツミ　五十嵐博之　石垣敏夫　岩田廣　浦山美穂子　大沢サクミ　大沢百合子　桑野修　鈴木五作　鈴木鎮一　清野武　戸根富美江　豊島一　豊島初枝　豊島ヤイ　山賀朝男　大沢一之　大沢友樹　窪田吉夫　豊外和之　野村知行　山崎勝栄
調査協力　石垣直一　宇野隆夫　遠藤佐　金子正典　坂井秀弥　田辺早苗　西村亜紀子　山崎ヨシ　吉田恵二　渡辺裕之　新潟江南高校　新潟県教育庁文化行政課　新潟県住宅供給公社　吉沢組　直り山・西山・松山各自治会ほか

I　調査に至る経緯

新潟市大江山地区は市の南東部郊外にあり、北側は阿賀野川、南と西側は横越村・亀田町に接する農村地区である。大江山地区の南東寄りにあたる直り山・松山・西山・笹山・蔵岡などは、周辺が人口増にある中で、近年人口減少傾向にあり、地元では深刻な問題となっている。新潟県住宅供給公社による分譲住宅団地建設計画が具体化したのは1985年の夏である。この計画に係る諸協議のひとつで、新潟県教育庁文化行政課から計画予定地近くに遺跡(直り山B遺跡)が存在することが指摘され、連絡を受けた新潟市教育委員会では同年10月、計画地内に遺物が散布していることを確認した。同地は、同年８月県が主体となり実施された遺跡詳細分布調査で発見されたばかりの新遺跡であった。同年12月、県文化行政課とともに試掘を含む分布調査を実施した結果を基に公社と協議を行ない、計画が既に実施段階にあり他に代替地がない、地元でも開発を望んでいるなどの理由により翌年早々に範囲等確認調査を実施し、記録保存が必要な範囲については本格調査を実施するという基本線が示された。1986年６月直ちに確認調査[註1]を実施した市教委は、遺跡が予想より良好な状態で保存されていたため、調査期間中を通じ、県教委の指導を求めるとともに、公社と協議を重ねた。本格調査実施のため、公社と新潟市の受託契約が同年６月末締結され、確認調査に引き続き本格調査が開始されることとなった。契約による発掘面積は遺構等の存在が予想される範囲約3,500m²、発掘終了予定は７月31日であった。

II　遺跡の位置と周辺の環境

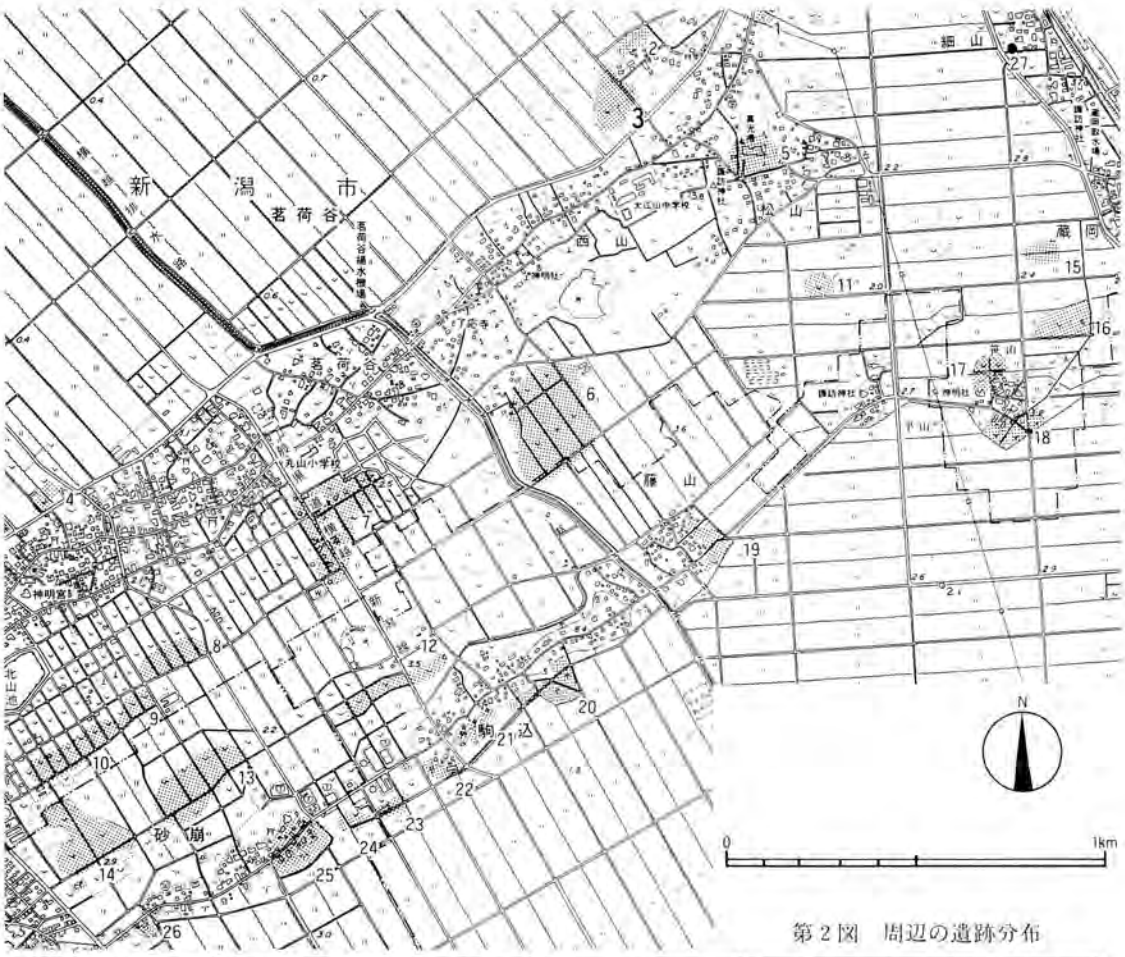
１．位置と地形

遺跡は新砂丘Ｉに分類[註2]される亀田砂丘の後列東端付近に所在する。現在の海岸線より約９km内陸に位置し、南側には旧地形地図で標高17.4ｍの最高位（現大江山中学校付近）を持つ亀田砂丘後列が連なり、北側は幅約３kmの沖積地を隔てて石山砂丘を望む位置にある。また東約１kmには現在の阿賀野川河道がある(第１・３図)。遺跡の所在地は砂丘本列が北西に小さく分岐して回り込んだ形の砂丘上にあり、本列とは小さな窪地を隔てている。しかしこの砂丘が本列の一部なのか、別砂丘なのか明らかではない。遺跡の現地表面は２ｍ前後と本列に比べ15ｍほど低く、周囲の水田面との比高は２ｍに満たない。調査地は大半が畑地となっており、ほぼ平坦である。旧村道はこの畑地を通り、大江山中学校側へ通じていた。

第１図　遺跡の位置と周辺の地形概念[註2]

2．周辺の遺跡

第2図に周辺の遺跡分布を示す。亀田砂丘は遺跡が集中的に分布する地域であるが、図はその東半分である。同砂丘上の遺跡では、亀田町城山遺跡の円筒下層d式と報告[注3]されているものが最も古く、以降近世までの各時代の遺跡が満遍なく認められる。時代的な分布では縄文・弥生が砂丘前列に偏在するのに対し、奈良・平安時代の遺物はどの遺跡にも認められ、しかも各遺跡の主要時期の過半を占めるなど、奈良・平安時代の遺跡分布は濃密である。これらのうち、後列砂丘を中心に6～10番遺跡など過去の開発により既に主要部を失なっている遺跡もあるが、その際銅製の銙帯（丸鞆1点）などを出土した茗荷谷遺跡[注4]の例などもあり、この遺跡群の今後の評価が期待される。小丸山遺跡もまた、平安時代を主とする遺跡であり、この遺跡群の一員といえよう。



第2図　周辺の遺跡分布

No.	遺跡名	時期等	No.	遺跡名	時期等	No.	遺跡名	時期等
1	直り山A	平安	10	前山	奈良・平安	19	藤山	奈良・平安・中世
2	直り山B	平安	11	松山向山	平安	20	小丸山(鐵越打)	縄文中・平安
3	**小丸山**	**縄文・平安・中世・近世**	12	居浦郷	平安	21	駒込墓所	平安
4	丸山	平安？	13	浦ノ山	平安（石鏃）	22	山ン家	弥生後・平安
5	松山	(中世陶器・近世陶磁器)	14	三條岡	奈良・平安	23	前郷	縄文晩・弥生後・奈良・平安
6	茗荷谷	奈良・平安	15	中山	縄文中・古墳？・奈良・平安	24	迎山	縄文中晩・平安・室町
7	丸山墓所裏	平安	16	蔵岡城山	縄文・平安・鎌倉(城館？)	25	砂崩	縄文中・奈良・平安
8	彦七山	奈良・平安	17	笹山神明社裏	平安	26	上ノ山	奈良・平安
9	金塚山	奈良・平安	18	笹山前	縄文後・弥生後・奈良・平安	27	細山石仏	中世

Ⅲ　調査の概要

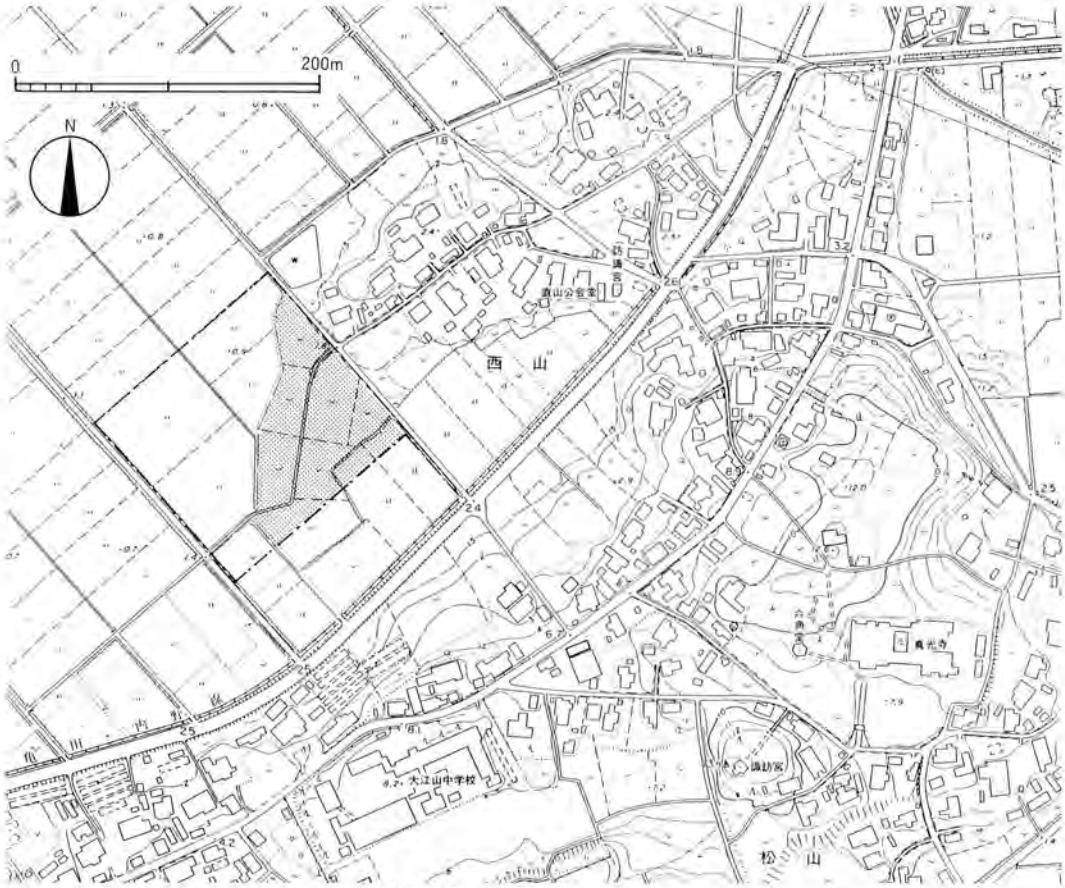
１．調査区の設定

本調査に係わる開発地は直り山集落西南に隣接する畑地大半を含むほぼ方形の区画と道路拡幅部分の約2.1haである。そのうち畑全域と水田の一部が遺跡に相当し、推定範囲は約8,700㎡である。これは、直り山Ｂ遺跡などを含め集落側に広がっていると思われる本遺跡の西南部に当る。

調査区は開発区画ラインを基に、その南東端を起点として一辺10ｍ単位の基本グリットとした（第４図）。このグリッドの方向はアルファベットのラインが真北より約36度西偏する。またこのグリッドを４分する１辺５ｍの小グリッドを設け、例えば「Ａ１グリッド１区」と呼称した（Ａ１－１区と表記）。当初発掘予定の約3,500㎡はＡ～Ｉの１～５ライン範囲にほぼ含まれる。調査の進行により平安時代の遺構を検出した結果、時間的制約の中で調査し得た範囲は、Ａ１～７・Ｂ１～７・Ｃ１～７・Ｄ１～５・Ｅ１～５・Ｆ１～６・Ｇ１～５・Ｈ１～５・Ｉ１～５・Ｊ１～４の各グリッドに含まれる約5,200㎡であった。推定範囲約8,700㎡の約60％である。なお、調査期間中、拡幅道路側縁にある排水路整備工事に関し、立合い調査を行い、一部に調査区を設定した（第５トレンチ）。

２．調査の方法と経過

調査時の遺跡の状態は、既に作付は完全に停止され、開発に係わる周辺の土留め等基礎工事が行



第３図　遺跡周辺の地形

われていた。遺跡である畑地内には確認調査で設定された第１トレンチが仮水路となり、第２～第４トレンチが埋め戻されずに残されていた。開発工程には時間的余裕がないと示されていたため、調査地については発掘終了区から順次埋め戻すこととし、前記の残されたトレンチで区画される範囲を順次掘り上げるという、調査と開発工事が併行する形となった。調査地の表土除去作業が開始されたのは７月２日である。

調査は基本的には重機によって遺物包含層到達面までを除去し、包含層上面でジョレンがけ等による遺物集中区などの検出を行った後、同層を人力によって掘り下げ、遺構確認面まで到達するという手順で行った。遺物の取り上げは、重機による除去層については数グリッドを包括した任意の区域を設け（大グリッドと称した）一括して取り上げた。次に主要包含層が認められる区域では小グリッド単位、同層が存在しないか不安定な区域では基本グリッド単位で取り上げた。遺構内遺物は原則として層位的に取り上げ、レベルの記録は一部に止めた。遺構等の測量は平板測量とし、一部（Ａ４・Ａ５・Ｂ４・Ｂ５・Ｃ４・Ｃ５の各グリッド）では簡易遣り方測量とした。遺構は調査区ごとに仮番号を付した。レベルは、公社が設置したベンチマーク（標高2.440ｍ）から、グリッド設定起点（Ａ１グリッド南東端）にレベル移動したベンチマークを使用した。

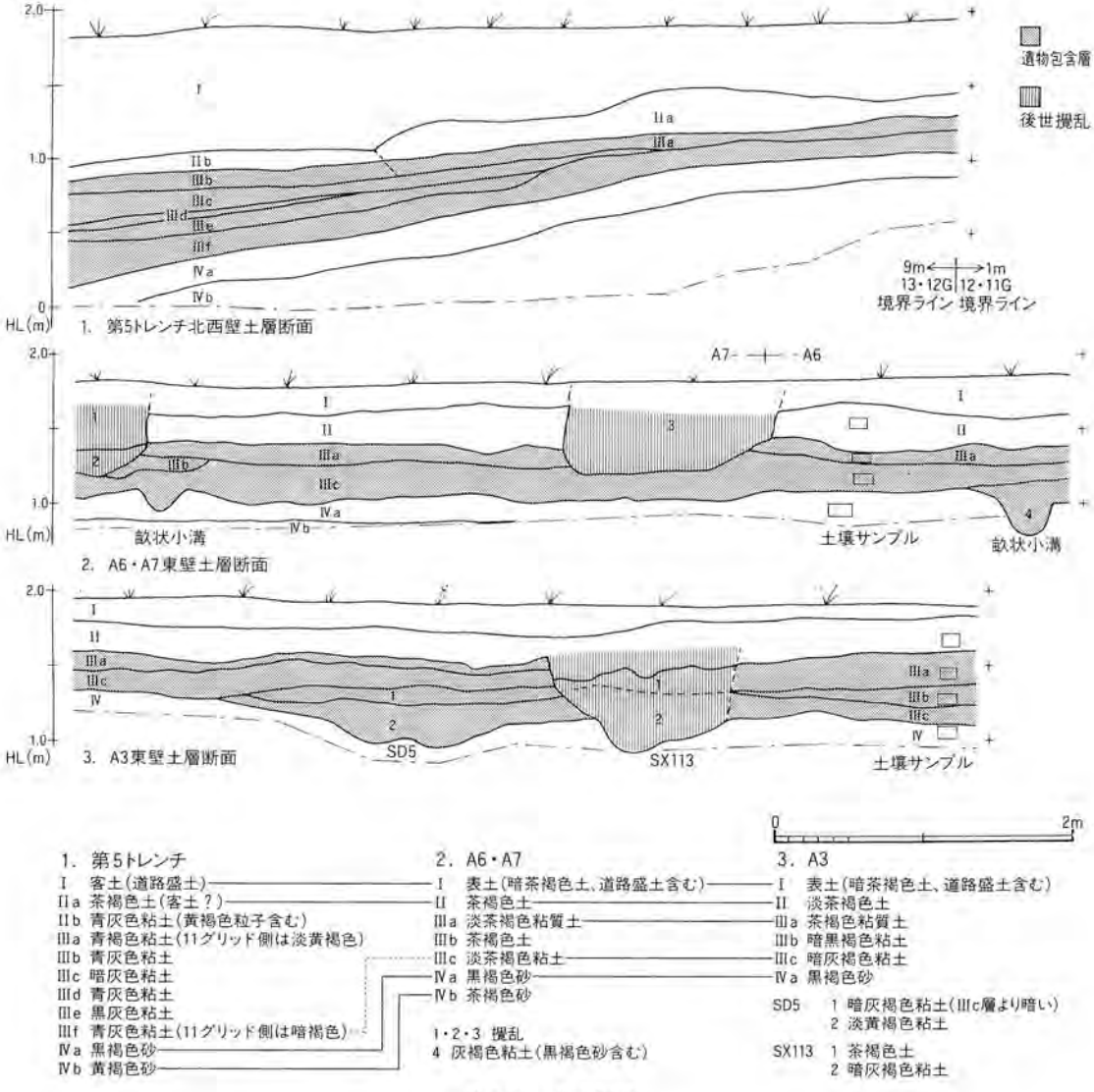
調査の進行は、遺物包含層の存在しない区域（Ａ１～Ｆ１グリッド、Ｇ列～Ｊ列のグリッドなどがある大グリッド）から調査を行ったため、順調に進行したが、包含層が安定する他の地区になると同層が粘土層で多量に遺物を含むなどにより時間を要した。また遺構等も多く検出されるようになり、７月中旬に到り予定期間内終了が困難と判断された。県教委・公社と協議を行い、県専門職員の派遣をいただくとともに、発掘期間の延長を図り、現地調査が終了したのは８月23日であった。

整理作業は、市教委社会教育課で行ない、図面整理後遺構別に通し番号を付し、注記等をした。したがって遺構番号等は調査時とは異なる。

第４図　現地形測量図・グリッド設定図

3．層　序

第５図に基本層序を示す。１は基盤の砂層が落ち込むところで遺跡の縁辺部付近、２・３は遺跡中心部の層序である。基本層序はⅠ層表土層、Ⅱ層暗～茶褐色土層、Ⅲ層粘土層（遺物包含層）、Ⅳ層砂層である。Ⅱ層は砂層が落ち込む付近から粘土層となる。Ⅲ層は基本的にはⅡ層と同質と思われるが、畑地内でも粘土質層と認められる層である。Ⅱ層・Ⅲ層は水田部では数枚の腐植植物層を持つ。Ⅳ層は上面が黒褐色の砂層で本遺跡の基盤層である。同層は緩傾斜しながらも、周囲の水田に広範囲に広がり、畑地を尾根にする。遺跡の現地形は基本的にはこのⅣ層表面に規制されているが、現地形のように明確な微高地状平坦面を呈さず曖昧である。現地形の平坦面はⅡ層・Ⅲ層の層厚変化で保たれている。つまり、畑地の周辺部ではⅢ層が厚く堆積し、標高２ｍを超える付近ではⅢ層を欠除する。なおＡ１～Ｅ１グリッドの水田はⅡ～Ⅳ層上部を削平して開田したものである（第４図）。Ⅲ層の遺物出土傾向は、黒褐色砂で初めて確認できる遺構と良く符合し、原位置を保っていると思われる。また遺構覆土も同層と同じものである。従って本遺跡は、黒褐色砂が形成された安定し



第５図　基本層序

た砂丘上に、河川堆積物と思われる粘土層が堆積した微高地上に営まれた遺跡であり、当時の生活面はこの粘土層中にあったと思われる。

4．遺跡の概要

本遺跡では縄文中期・平安時代・中世・近世以降の各時代が認められる。このうち遺構が検出されたのは平安時代と近世以降である。調査の範囲は、本遺跡の主要時期である平安時代の遺構が広がる主要な範囲である。他期については、この範囲内で副次的に明らかになったものであり、資料も少ない。遺跡の遺構確認面はA～F列で1m前後、I列付近が最も高く2.15m前後を測り、全体に南東向きの緩傾斜を中心に広がり、北西向きになると遺構をほとんど認めない。また、I～L列は、主要包含層を欠除しており、現代の攪乱も多く、遺跡の状態は良くない。

縄文時代　細片が微量出土しただけであり、今のところ断片資料に止まる。

平安時代　概ね9～10世紀の集落跡の西南部に相当する範囲の主要部が検出された。遺構は重複が認められ、今後検討が必要である。遺物量は多量で現在その一部を測図したに止まる。

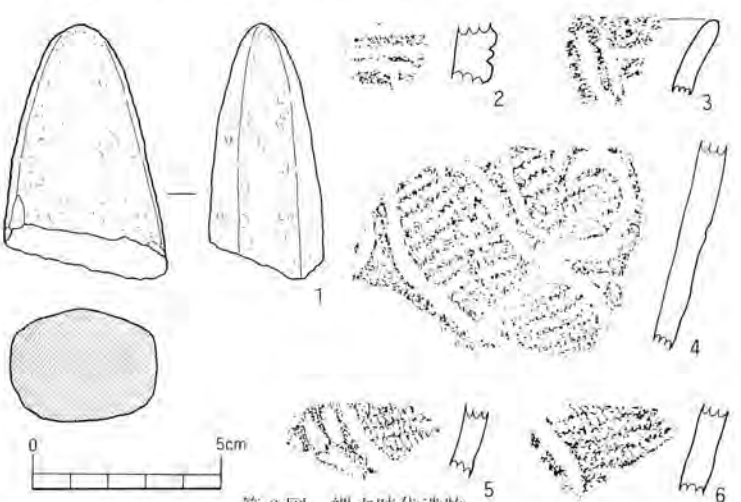
中世　1点だけである。今後の整理によっても大幅な増加は望めない。

近世以降　不定形の溝状のものと、土坑状の2態の遺構がある。土坑状のものを除けば、遺物は細片で少なく、集落跡とは認め難い。遺物も含め、大半は近世末期以降である。

Ⅳ　おもな遺構と遺物

1．縄文時代

当該期の遺構は検出されず、石器1点・土器5点の微量な遺物が出土したにすぎない（第6図）。1は凝灰岩製の磨製石斧。表面は風化し、刃部を欠損する。B4－2区出土。2は半截竹管状工具により2条の隆帯が施された土器で黒褐色を呈す。E3－3区出土。3は口縁部破片で浅い沈線により文様が描かれる。器壁は比較的薄く、胎土は赤褐色である。SD5出土。4～6は、赤褐色を呈し胎土に雲母を含み、内面調整の丁寧な土器で、同一個体の可能性が強い。4には沈線によって渦巻状の文様が描かれ文様帯内には0段多条のRL縄文が施文されている。4・6がA3－2区、5がSD5出土。以上の遺物の所属時期は2が中期前葉、4～6が中期後葉の大木9式に併行するものと思われ、1・3もそれらに近い時期の所産であろう。



第6図　縄文時代遺物

2．平安時代

検出された遺構は掘立柱建物（ＳＢ）14棟・井戸（ＳＥ）９基・土坑（ＳＫ）５基・溝（ＳＤ）などである。これらの遺構は概ね北東から南西方向に拡がり、列のほぼ中央に東西棟建物が分散し、それらの建物の東側に井戸が存在する傾向が窺える。さらに建物周囲には畠の畝の痕跡とされる畝状小溝が数本を単位としてあり、また塵芥穴と考えられる土坑が検出された。溝には、この他に建物の雨落ち溝や建物群を区画するために作られたと思われる溝もある。これらの遺構の中には建物間、溝と建物、そして溝と畝状小溝など重複するものが見られ、数時期にわたって営まれたことが明らかである（第32図）。しかしながら、現在整理作業が完全に終了していないので詳しく検討を加えていない。

遺物は、コンテナで約40箱と発掘面積の割には多く出土した。とくに建物周辺からは明確な遺構が検出されないにもかかわらず、土器が多量に出土する地点が何か所か見られ、また雨落ち溝や土坑・井戸からは良好な一括資料が得られた。本遺跡では土師器・須恵器・黒色土器の他に県内では類例のない緑釉陶器素地の製品が出土し注目される。墨書土器は80数点と比較的多く出土している。杯の製作技法を見ると土師器が底部回転糸切り技法、須恵器が回転ヘラ切り技法が大半を占め、両者の量比は大まかに見て４：１ないし５：１と土師器杯が多い傾向にあり、地域性・時代性を反映していると言えよう。遺物ではこの他に建物の柱根や土坑・井戸から出土した木製品・種子類などの有機質の遺物が多くあり、低地遺跡の特徴として特筆されよう。

以下に各種遺構を中心に順をおって記す。遺物については整理途上にあるため、井戸・土坑出土のものを図示したにすぎない。特徴的な遺物のみ遺構の後で触れるに止める。

a　建　物（ＳＢ）

掘立柱建物が計14棟検出された。ＳＢ９Ｂを除く他は東から15～40度南偏する東西棟建物である。14棟の建物以外にも多くの柱穴があり、さらに数棟の建物が存在した可能性が残されている。なお建物の桁行・梁行長・各柱間寸法などの数値[注5]は暫定的なもので再検討の予地がある。

ＳＢ１　（第20図・図版２）　Ｈ２～３にある３間（5.7ｍ）×２間（4.8ｍ）の東西棟建物。方位Ｎ―58°―Ｗである。柱間寸法は梁行が2.45ｍ等間であるが、桁行は等間でなく、北側柱列が西より1.8ｍ・2.1ｍ・1.8ｍ、南側柱列が2.1ｍ・1.8ｍ・1.8ｍとなる。なお東側１間目の棟通りに間仕切りかと思われる柱穴が存在する。柱掘形は平面形が円形や隅丸方形で一定でなく、径40～50cmを測る。ＳＢ１・ＳＢ２と重複する。

ＳＢ２　（第20図　図版２）　Ｇ１～２・Ｈ１～３にある５間（11.4ｍ）×２間（5.0ｍ・4.7ｍ）の東西棟建物で、方位はＮ―45°―Ｗの総柱建物であるが、西側３間目の束柱は検出されなかった。柱間寸法は、桁行は東側１間が南北とも３ｍとなるが他の４間は南北で異なる。北側柱列は西より４間目が2.4ｍとなる他は３間とも2.0ｍとなり、南側柱列では４間とも2.1ｍとなる。梁行は東妻では2.35ｍ等間であるのに対し、西妻では北より2.4ｍ・2.6ｍである。柱掘形は隅丸方形で一辺40～50cm・深さ40～60cmを測る。

ＳＢ３　（第20図）　Ｇ２～３・Ｈ２～３にある３間（5.4ｍ）×２間（4.5ｍ・4.7ｍ）の東西棟建物。方位はＮ―70°―Ｗである。柱間寸法は、桁行が2.4～2.6ｍ、梁行は東妻が北より2.3ｍ・2.4ｍとなるが、西妻では中柱が確認されなかった。柱掘形は、径20～40cm・深さ30～40cmを測り、平

面形は円形を呈す。

ＳＢ４　（第21図）　Ｆ３～４で検出された４間（10.4ｍ）×２間（5.0ｍ・4.8ｍ）のやや歪んだ東西棟建物。方位はＮ―61°―Ｗである。柱間寸法は、桁行は等間でなく、梁行は東妻で2.4ｍと等間である。西妻では中柱を確認できなかった。なお東側１間目と２間目の棟通りには各々柱穴が存在する。柱掘形は円形で径約30cmを測る。

ＳＢ５　（第22図）　Ｆ３～４・Ｇ３～４にある５間（11.6ｍ）×１間以上（5.5ｍ・5.2ｍ）の東西棟建物。方位はＮ―74°―Ｗである。東西の妻中柱と南側柱列西第２柱穴は検出されなかった。柱間寸法は、北側柱列・南側柱列とも西側３間分は2.5ｍ・2.5ｍ・2.3ｍとなるが、東側２間分は南北柱列で異なる。柱掘形は、平面形で円形・隅丸方形を呈し一辺40～60cmを測る。南側柱列東第１・第２・第３柱穴の南側約90cmの位置には径20～30cmの柱穴があり廂の可能性が考えられる。

ＳＢ６　付**ＳＤ２**　（第22図）　Ｅ４・Ｆ３～４にある５間（12.2ｍ・12.1ｍ）×２間（4.8ｍ・5.2ｍ）の東西棟建物。方位はＮ―74°―Ｗである。東妻中柱は検出されなかった。柱間寸法は、梁行が西妻で2.4ｍ等間、桁行は西側１間目と５間目は北側柱列・南側柱列とも2.5ｍ・2.8ｍと等しいが、あいだ3間は北南で対応しない。ただし北側では西第2～4間が2.3ｍ等間となり規則性が窺える。柱掘形は径40～60cm・深さ40～60cmを測り、平面形隅丸方形を基本とする。またＳＤ２は、ＳＢ６の南側柱列の南方１ｍ程のところにあり、長さ5.8ｍ・最大幅1.2ｍ・深さ30cmを測る溝でその位置からＳＢ６の雨落ち溝の可能性が強い。覆土からはコンテナ２箱程の遺物が出土している（図版６・裏表紙）。ＳＢ５と重複する。

ＳＢ５・ＳＢ６は、ほぼ同規模で、建物方位も一致するなど似た点が多く、同じ規格の上で建て替えられた可能性がある。

ＳＢ７　（第21図）　Ｄ３・Ｅ２～３にある４間（7.9ｍ）×１間以上（4.6ｍ・4.5ｍ）の東西棟建物。方位はＮ―61°―Ｗである。東妻・西妻とも中柱は検出されなかった。柱間寸法は、桁行は等間ではないものの、北側、南側柱列でほぼ対応する。柱掘形は、円形を呈し径30～50cm・深さ約30cmを測る。ＳＢ８と重複する。

ＳＢ８　（第21図）　Ｄ３・Ｅ３～４にある３間（7.8ｍ）×２間（4.4ｍ）の東西棟建物。方位はＮ―61°―Ｗである。柱間寸法は、梁行は東妻・西妻とも北から2.4ｍ・２ｍとなるが、桁行は等間とならない。柱掘形は隅丸方形を呈し一辺30～50cmを測る。北側柱列西第１・第２柱穴から柱根が検出されている。ＳＢ７とＳＢ８は、ほぼ同規模・同方位でＳＢ４とＳＢ５の関係に類似する。

ＳＢ９Ａ　（第25図）　Ｃ４～５で検出された。当初ＳＢ９Ｂとともに１棟の建物と考えたが、検討の結果、別の建物とした。２間（4.4ｍ）×２間（3.8ｍ）の東西棟建物で、方位はＮ―50°―Ｗである。柱間寸法は、梁行は1.9ｍ等間、桁行は西から2.3ｍ・2.1ｍである。柱掘形は円形を呈し径30～50cmを測り、中には柱根を残すものがあった。ＳＢ９Ｂ・ＳＢ10と重複する。

ＳＢ９Ｂ　（第25図）　Ｃ４～５にある。２間（3.8ｍ）×１間（2.4ｍ）の南北棟建物。方位はＮ―40°―Ｅで、東西方向の柱筋をＳＢ９Ａと揃える。柱間寸法は、桁行で1.9ｍ等間である。柱掘形は円形を呈し径30～50cmを測る。

ＳＢ10　（第25図）　Ｂ４～５・Ｃ４にある３間×２間のやや歪んだ東西棟建物で、方位はＮ―52°・49°―Ｗである。桁行は北側柱列5.0ｍ・南側柱列4.7ｍ、梁行は4.2ｍを測る。柱間寸法は、梁行

は2.1mの等間、桁行は等間とはならないが、東側1間目が1.5mとなる。柱掘形は円形で径40cm程を測る。西妻中柱・南側柱列西第2・第4柱穴には柱根が遺存していた。SB9A・SB9B・SB11A・SD3Bと重複する。

SB11A　付SD3　（第24図・第25図・図版2）A4・B4～5にある5間（13.2m）×2間（4.8m）の東西棟建物、方位はN－55°－Wである。西側1間の棟通りに間仕切りかと思われる柱穴が存在する。柱間寸法は、梁行が2.4m等間、桁行は等間ではなく、西から2.4m・2.1m・3.3m・2.7m・2.7mとなる。柱掘形は径50～70cmで平面形は円形・隅丸方形を呈する。北側柱列西第2柱穴の掘形上部からは、底部に「七」と墨書きされた土師器杯が完形で出土した(裏表紙)。建物廃棄にかかわるものであろうか。

本建物の西側と南側には、素掘りの雨落ち溝SD3A・SD3Bがめぐっている。その連結部分はトレンチによって壊されているが、本来はL字形をなすものであろう。SD3Aは、最大幅140cmを測り、深さ35cm程の断面梯形を呈している。西妻柱列との間隔は50～80cmである。SD3Bは蛇行状に掘られているため一定ではなく80～180cmの幅を有し、深さ30cmを測る。断面形はSD3Aに近い。両溝からは、コンテナ1箱程の遺物が出土している(図版6・裏表紙)。

SB11B　（第24図・第25図・図版2）　A4・B4にある2間（5.8m・5.6m）×2間（5.1m）の東西棟建物。方位はN－57°－Wで、SB11Aと重複し、わずかに方位を異にする。束柱がある。東妻中柱は検出されなかった。柱間寸法は、梁行は北から2.7m・2.4m、桁行は等間とはならないが東1間は北側、南側柱列とも2.7mを測り規格性がある。柱掘形は隅丸方形を呈し、一辺約50cmを測る。北側柱列西第2・第3柱穴には柱根が遺存していた(図版8)。

SB12　付SD4　（第24図・第25図・図版3）　A4～5で検出された5間（10.0m）×3間（6.5m）の北廂付東西棟建物。方位はN－54°－Wで東妻柱列をSA11Aと揃えている。廂部分は道路下へ延びており西第5・第6柱穴は確認していない。柱間寸法は、桁行は等間ではなく、廂・北入側柱列は西から2.1m・2.1m・1.8m・1.9m・2.1m、南側柱列は2.1m・1.8m・1.9m・1.9m・2.3mを測る。梁行は身舎2.5m等間、廂部分は1.5mである。柱穴掘形は身舎が一辺80～100cm・深さ60～70cmの方形ないしは隅丸方形となるが東妻の掘形は他に比べ小ぶりである。廂部分では径40～60cm・深さ40cm程の円形となる。身舎掘方埋土には黒褐色砂と青灰色砂が互層となるものも見られた。また柱根の遺存が良好で、身舎で径20～30cm、廂ではそれより一回り小さなものが使用されており、中には礎板が据えられたものもあった(図版8)。身舎の棟通りには、不規則に4、5個の円形掘形が確認されており、束柱になる可能性がある。

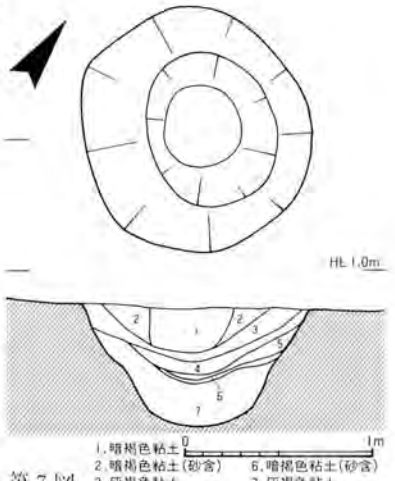
雨落ち溝SD4は、本建物の西側と南側をL字形にめぐり、幅50～70cm・深さ40cmを測り、断面逆梯形を呈す。西妻柱列との間隔80～90cm、南側柱列との間隔は90～130cmである。SD4B・SD4Cからはコンテナ3箱と多量の遺物が出土し、その中には墨書土器25点が含まれていた(図版6・裏表紙)。

SB11AとSB12の2棟は、東妻柱列を揃え、ともにL字形の雨落ち溝を有す床面積60m²以上の規模の大きな建物である。特にSB12は一辺1m近い方形掘形で、唯一廂を有しており、本遺跡の中心的な建物の一棟であったことが推測されよう。またSB11A・SB12の東妻柱列から8m程の位置には、後述するように、方位の近いSD5が南北に掘られ、さらに2棟とSD5の間には方形

井戸枠を据えたＳＥ９が存在する。このような規則性のある配置は一般集落ではあまり見られず、かなりの計画性の高さが窺えよう。いずれにしても、本遺跡のこれからの遺構群が何如なる性格を有したものか明らかになるには、今後の整理作業に負うところが多いと言えよう。

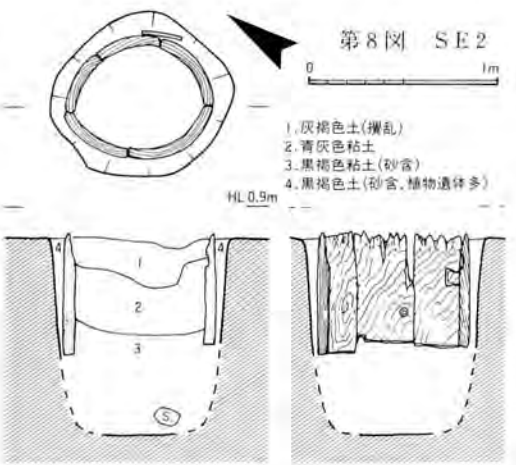
b　井　戸　（ＳＥ）

井戸は計９基検出された。素掘りのものが６基、円形木枠・方形木枠が各１基と水溜めに曲物を用いるものが１基ある。底面は９基とも基盤層である青灰色砂層に達していた。(注６)



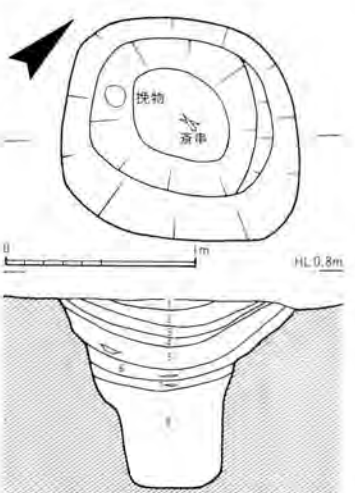
第７図　ＳＥ１

ＳＥ１　（第７図）　Ｂ２、ＳＫ１の北東約２ｍにある素掘井戸。平面形は径120～130cmの円形。掘形断面Ｕ字形を呈す。深さは65cm（ＨＬ＝15cm）を測る。各層とも植物遺体を多く含む粘土質であるが、２・４・６層では砂質土がまざっている。遺物は少なく、土器では図示し得た土師器鍋口縁部破片（第27図41）の他に杯の小片があるにすぎない。また最下層からは最大長30.3cm・最大幅5.2cmを測る「く」の字形の木製品が出土した。全面に加工痕を残し、完形である（第29図105）。



第８図　ＳＥ２

ＳＥ２　（第８図）　Ｄ２で検出された掘形径85～100cmのやや歪んだ円形を呈し、深さ130cm（ＨＬ＝－30cm）を測る井戸。中央には丸太を分割刳抜いた縦板５枚を組み合わせた径65～80cmの円形井戸枠を据える（図版８）。板材は幅30～60cm、厚さ６～７cm、長さ60cm以上あり、ちきり穴を有するものが２枚あった。上端は腐蝕していたが、周縁には板材を立て廻らしていた。井戸枠内２・３層からは大きな樹根が、また底面近くからは径20cm前後の円礫が出土した。井戸廃棄の際の祭祀にかかわるものであろう。遺物は須恵器横瓶の胴部破片１点のみで、外面には淡緑色の自然釉がかかる（第28図86）。

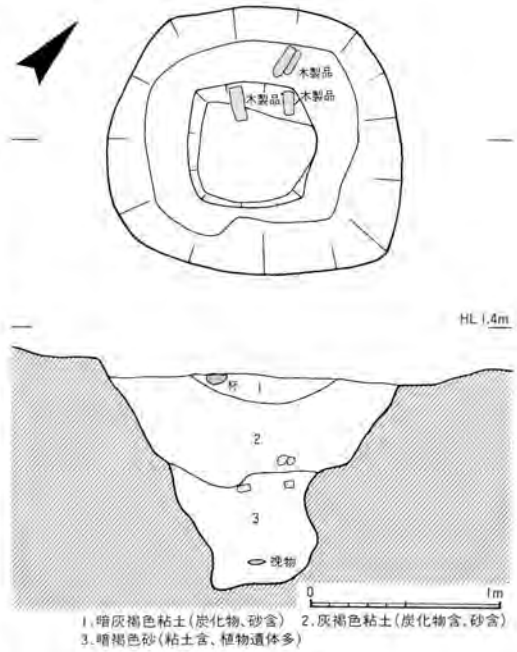


第９図　ＳＥ３

ＳＥ３　（第９図）　Ｅ１～２・Ｆ１～２にかけてある素掘井戸。平面形125×115cmの隅丸方形を呈し、深さ100cm（ＨＬ＝－30cm）を測る。壁面中ほどに段があり、それより下位は狭くなり、一辺50cm程の隅丸方形となる。この部分には、植物遺体を特に多く含む粘土混じりの黒褐色砂質土が堆積しており、埋め土の可能性が考えられる。また３・４・５層の各層間には0.5cm程の厚さで木葉など植物遺体を含む黒褐色腐植土層が観察された。遺物は、

6・7層から斎串が2点ほぼ同じ位置より上下して出土しており（第29図107・108）、井戸廃棄の祭祀にかかわるものであろう。この他、5層から口径16.5cm・底径10.7cmの平高台皿形の木製挽物（同106）が、土器では須恵器杯が1点出土している（第27図42）。

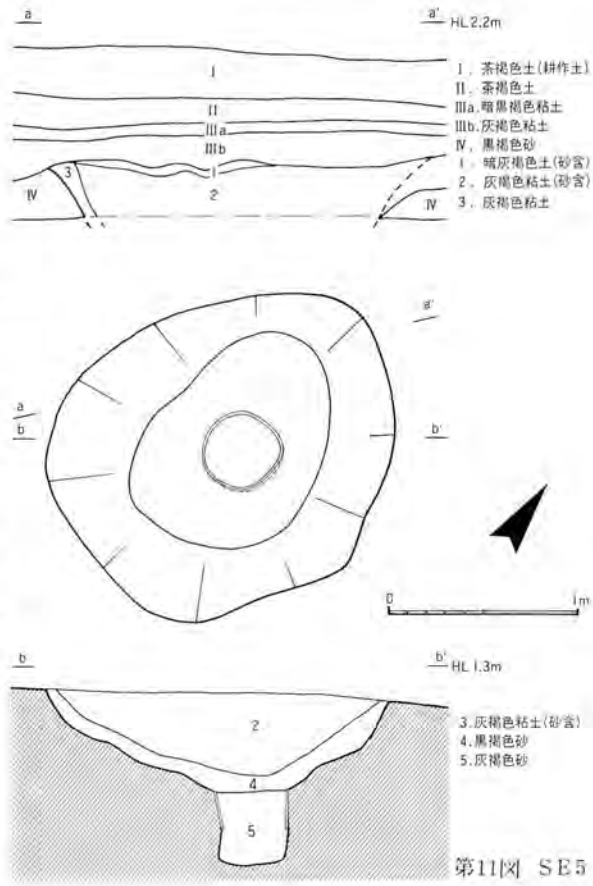
ＳＥ４　（第10図）　Ｇ２にある平面形155×140cmの隅丸方形で深さ110cm（ＨＬ＝０cm）の素掘井戸。中ほどにゆるい段を有し、それより下では狭く、一辺70cm程の隅丸方形となる。１・２層は炭化物を含む層で、１層には特に多く含まれていた。両層からは比較的多くの遺物が出土し、１層上部からは油煙の付着した完形の土師器杯（第27図51）、２層からは墨書のある須恵器杯の底部（同50）が検出されている。そして２層下部の段の部分からは、先端を尖らせた杭状木製品（第29図109・110）が２本並んで出土した。下層の植物遺体を非常に多く含んだ３層の底面付近では、木製挽物の皿（図版７）が出土し、底部に「二」と墨書のある完形の須恵器杯が逆位の状態にあった（第27図47）。また３層上部からは一端を切断した杭状木製品（第29図111）と板材（同112）が出土している。



第10図　ＳＥ４

ＳＥ５　（第11図）　Ｆ２、ＳＥ４の北１ｍのところで検出された。平面形190×170cmの不正円形で深さ95cm（ＨＬ＝25cm）を測る。断面はすり鉢状を呈し、ほぼ中央に径約40cm、深さ40cmの円筒形の水溜めがある。水溜上部には高さ22cmの曲物（図版８）がはめられていた。遺物は少なく、図示し得たものは1点のみである（第28図90）。

ＳＥ６　（第12図）　Ｉ４にある素掘井戸。平面形90×80cmの不整隅丸方形で深さ70cm（ＨＬ＝30cm）を測る。断面中ほどより下位では細くなり径40cm程の円形プランとなる。覆土にはいずれも、木葉・種子などの植物遺体が多く含まれていた。遺物が



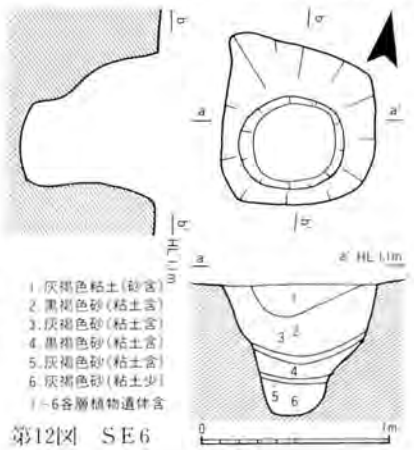
第11図　ＳＥ５

少なく、残存長22cm・最大幅２cmの棒状の木製品（第30図113）を図示し得たのみで、土器は土師器甕の胴部小片が１点出土したにすぎない。

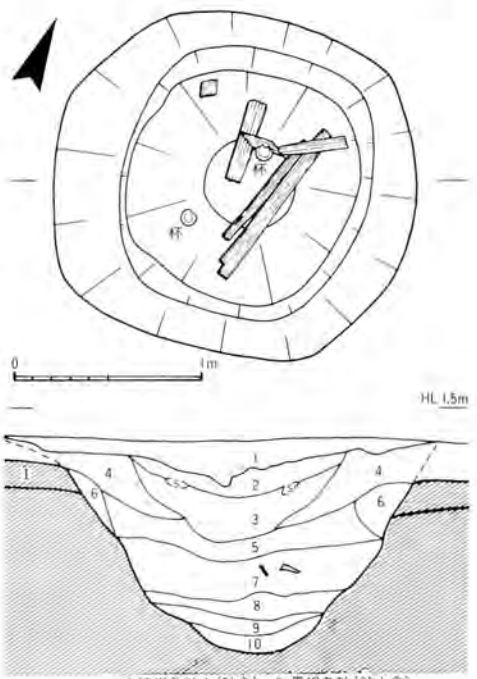
ＳＥ７　（第13図・図版３）　Ｇ２～３にある平面形一辺180cm程の隅丸方形をなし、深さ115cm（ＨＬ＝25cm）の素掘井戸。段面中ほどよりやや下位に、わずかな段があり、底面はすり鉢状を呈す。段の部分からは、ほぼ同レベルの位置で板材６点が出土した。中には残存長103cmで両端に枘を作り出した断面三角形のものがあり、井戸枠部材の可能性が考えられる（第30図117）。また２層からは、完形の須恵器杯２個体が正位の状態で出土し、うち１点には記号状の墨書が認められた（第27図55・61）。この他にも１層から２層にかけては墨書土器２点（同59・60）。ふいごの羽口（第30図120）を含む多くの遺物が出土した。量的には須恵器が土師器よりも多い。60は、「奏」あるいは「秦」・「泰」などと読みとれる墨書がある白っぽい胎土の特に調整の丁寧な有台杯である。本址出土須恵器杯は総じて厚手の作りのものが多く、本遺跡の中では古い様相を残した土器群である。

ＳＥ８　（第14図）　Ｂ２、ＳＫ１の北西約1.5ｍの位置にある素掘井戸。水路により半分以上が破壊されていた。平面形は一辺130cm程の隅丸方形に復元されよう。深さ65cm（ＨＬ＝30cm）を測る。遺物は土師器小片が出土した。

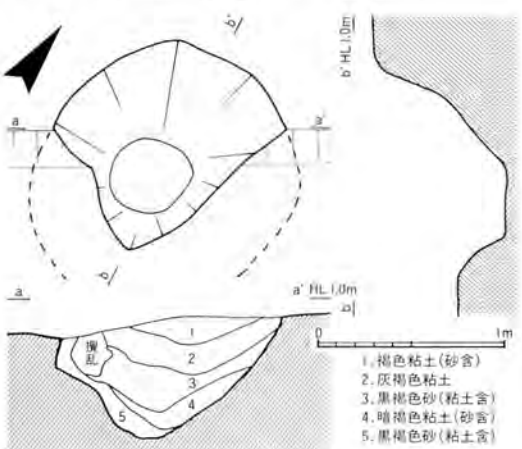
ＳＥ９　（第15図・図版３）　Ａ３で検出された上面で一辺210cmの隅丸方形を呈し、深さ120cm（ＨＬ＝－10cm）を測る井戸。掘形は確認面から40cm程でゆるい段をなし、それより下位では一辺120cmの隅丸方形となっている。掘形内には横板に溝状の切り辺みをつけて井籠状に組んだ内法70cmの方形井戸枠を据えて（第31図・図版８）その周縁には縦板を立て廻らせていた。井戸枠は三段が遺存していたが、三段目上端にも切り込みがあり、当初はさらに上に数段組まれていた可能性があ



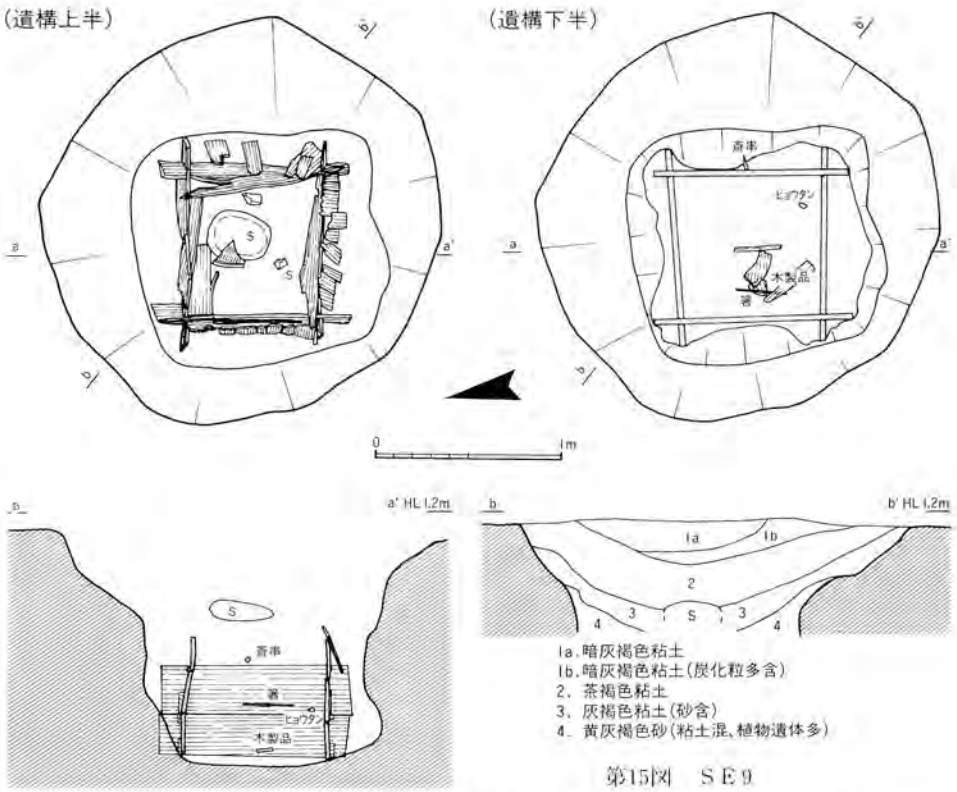
第12図　ＳＥ６



第13図　ＳＥ７



第14図　ＳＥ８



第15図　ＳＥ９

る。また井戸枠の横板外面には、下段のものから順に鋭利な線刻によって Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの刻書がなされ、組み立てる時の順番を示している。井戸枠上端部と概ね同じ高さには径30cm程の大石が置かれ、その上には須恵器鉢の大破片がのっていた(第27図72)。井戸枠内からは、この他に「十」と墨書のある須恵器杯（同71）をはじめとした土器類・箸などの木製品（第30図114・116）・砥石（同119）やモモ・クルミ・ヒョウタンなどの種子類（図版７）が出土し、井戸枠と掘形の間の埋土からは須恵器杯片（第27図63）・斎串（第30図115）・加工木材などが出土している。

ｃ　溝（ＳＤ）

・５本の溝と多数の畝状小溝が検出された。このうちＳＤ２・ＳＤ３・ＳＤ４は建物の雨落ち溝として既に述べたので、その他の溝について簡単に触れておく。

ＳＤ１　Ｈ３にあり残存長３ｍ・最大幅１ｍ程で深さ６～７cmを測る東西溝。出土遺物はなく、近世の遺構の可能性も考えられる。

ＳＤ５　Ａ３・Ｂ２～３にかけて検出された幅1～2.5ｍ・深さ20～30cm程で断面逆梯形を呈す南北溝。深さ・幅とも一定ではなく、仮設水路より北側で若干広くなり、さらに道路下へ延びている。方位Ｎ－30°－Ｅ。コンテナ２箱程の遺物が出土している。本溝は前述した様に、ＳＢ11Ａ・ＳＢ12の東妻柱列と近い方位にあり、両者と関連した遺構と考えられる。

畝状小溝

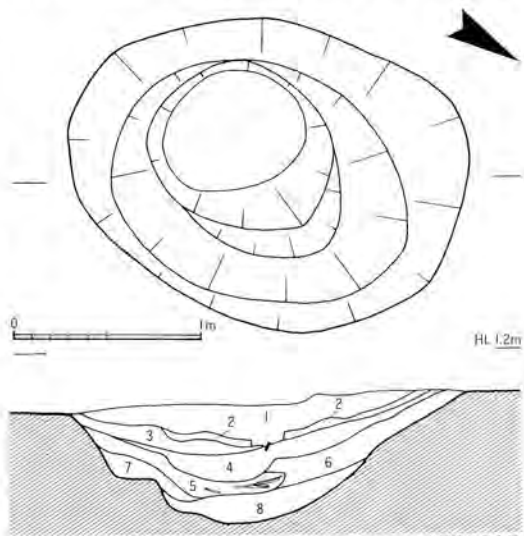
幅20～50cm・深さ数cmから数10cm程の細長い溝で、数本ずつ平行に並んで単位をなしている。溝の方向は東から5～50度南偏した東西溝が過半数を占め、南北溝は少ない。間隔は40～50cmの狭いものと、２ｍ前後の広いものの2種類に大別される。畝状小溝の中には建物と重複するものがあり、また畝

状小溝間の重複も見られた。出土遺物は、平安時代のものに限られ、他の時代のものは検出されていない。重複関係を見ると近世の遺構にはすべて切られているので、それらより古い時代の遺構であることは確実である。第23図に畝状小溝の一部を示す。

d　土　坑　（ＳＫ）

計５基検出された。ＳＫ１以外の遺物の出土はさほど多くはない。

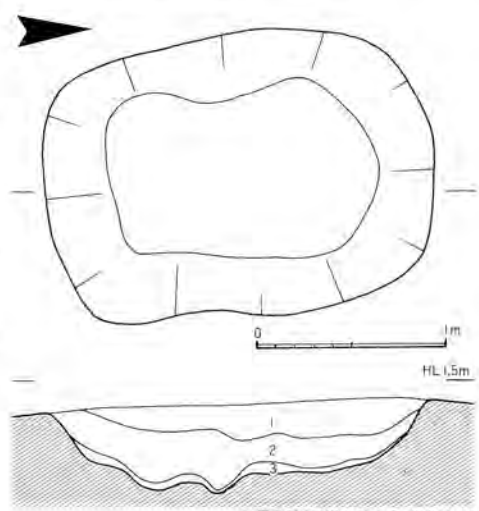
ＳＫ１　（第16図）　Ｂ２で検出された平面形210×160cm程の楕円形で、深さ60cmの土坑。掘形断面は、丸底状を呈し、壁面南側に段を有する。本址からは多数の土器類、木製品が出土したが、１層から６層にかけて特に多く見られた。杯は、須恵器底部小片・黒色土器（第26図９・24）を除く総てが土師器で、中には油煙の付着したものや墨書のあるものが見られた。24は、内外面漆黒の磨きの丁寧な土器で底径4.9cmを測る。底部は削り出しにより平高台を形成する。磨きは、底部外面と胴部外面および口縁部内外面は横方向のヘラ磨き。底部内面は放射状磨きである。胎土は灰褐色を呈す。口縁部片と接合せず器形復元に疑問が残る。25は須恵器壺の底部破片。高台内側には墨痕が残り摩滅が著しく、硯として転用されたものである。図示し得た土器は、この他に須恵器甕の口頸部破片がある。木器には曲物（第29図99・101・104）や先端を加工した杭状木製品（同102）・用途不明木製品（同103）がある。100は、残存長21.2cmを測る糸巻の枠木（ｶﾀｾﾞ）で、両端から内寄りに径１cm程の横木を結合するための枘孔をあけている。機織りの傍証資料として貴重なものとなろう。



第16図
ＳＫ１

1.灰褐色粘土(砂含)　5.暗褐色粘土(砂含)　1～6各層遺物包含層
2.黒褐色粘土(砂含)　6.灰褐色粘土(砂含)　(6層に多く含む)
3.灰褐色粘土(砂含)　7.暗褐色砂　1～8各層植物遺体多
4.灰褐色砂(粘土含)　8.灰褐色粘土(砂含)

ＳＫ２　（第17図）　Ｇ５にある平面形205×145cmのやや角を持った楕円形で、深さ40cmの土坑。断面はなだらかに立ち上がる。１層は灰褐色粘土混じりの黒色砂層で遺物の大半はこの１層より出土した。図示し得たものには、須恵器杯・有台杯・甕・砥石（第30図118）がある。



第17図　ＳＫ２

1.黒色砂(灰褐色粘土含,炭化物含)
2.黒色砂(炭化物含)
3.黄褐色砂

ＳＫ４　Ａ２にある平面形180cmの円形で深さ30cm程の土坑。断面逆梯形をなす。図示し得た遺物は土師器杯、鍋・須恵器甕小片など少ない。

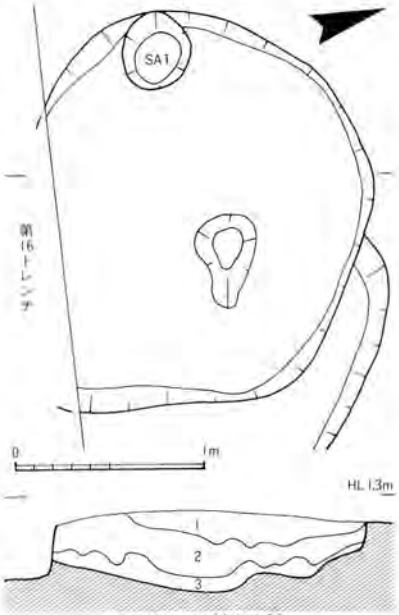
ＳＫ５　（第18図）　Ｅ４にある平面径約200cmの円形で深さ40cmの土坑。トレンチによって壊され全容は不明。図示した遺物以外に須恵器短頸壺・甕がある。ＳＡ１の柱穴に切られている。

e　おもな遺物

土器（第19図）　本遺跡の土器群には、既述のよう

に土師器・須恵器・黒色土器がある。数点の土師器甕以外は総てロクロ調整される。杯について見ると、土師器は回転糸切りの無台杯、須恵器は有台・無台杯とも回転ヘラ切り技法が大半を占め、黒色土器は無台杯で内外面ヘラ磨きするものが多い。ここでは、これら以外の本遺跡では稀少な土器について簡略に記す。

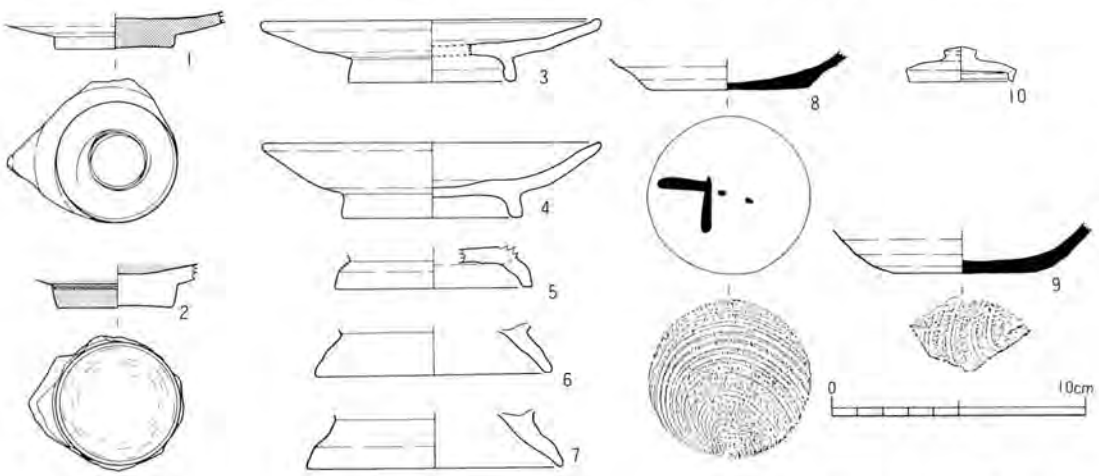
1　緑釉陶器素地。底径4.7cm、削り出しにより平高台を成形する。調整は、外面横方向ヘラ磨き、内面は不定方向のヘラ磨き。底部外面は、ロクロ削りの後ヘラ磨きを行ない、さらに中央部に浅い同心円状の沈線をめぐらす。器種は体部のたちあがりから皿形になろう。胎土は軟質で黄褐色を呈す。E３－４区出土。京都府石作窯跡のものに類似(注8)しており、そこでは９世紀後半に比定されている。越後における土器編年の年代を決定するうえで貴重な資料となろう。



1.灰褐色粘土(炭化物含)
2.黒褐色砂(炭化物含)
3.黄褐色砂(黒褐色砂をブロック状に含)
第18図　SK5

2　黒色土器。底径4.5cmの比較的高い平高台で、底部外面が僅かに凹む。摩滅が著しく調整不明。内面に漆状の付着物が残る。胎土は黒灰色。B２－１区出土。第26図24などとともに、１のような緑釉陶器の底部形態を模倣したものであろうか。

３～７　有台の土師器供膳形態である。３～４は高台が付く皿。３の高台は、内外面内彎し、接地面は明確な稜を持たず、丸くおさめる。口縁端部は上方へ僅かに屈接し、内面は沈線状となる。内外面ロクロナデ。C４－４区出土。４も３と同形態、口縁端部内面が僅かに凹む。全面摩滅している。C４－４区出土。５は低い高台で、内彎しながら外方へ踏んばる。接地面は面をとる。内外面ロクロナデ。B４－２区出土。６・７は高い高台で、ともに接合面から剥離している。６は僅かに内彎しながら外方へ広がり端部は丸くおさめる。内外面横方向のヘラ磨き。B２－３区出土。７は外傾ぎみに広がり、中程より少し内彎し端部に至る。内外面丁寧なナデ。C３－１区出土。



第19図　平安時代遺物１

8・9は、底部回転糸切りの須恵器杯。9は体部下端が凹み、底部には判読不明の墨書がある。ともに内面ロクロナデが丁寧になされ凹凸が少ない。各H2—2区・D3—2区出土。本遺跡で、糸切りの須恵器杯は図示した2点を含み、計3点を数えるにすぎない。

10　径4.3cm・器高1.4cmを測る小形の蓋。縁部は下方へ屈折し、端部でわずかに外反する。鈕はやや扁平な擬宝珠形をなす。内外面ロクロナデ。胎土は黄褐色で緻密、一般の土師器との違いは歴然としている。小形壺の蓋になろう。D3出土。

土錘（図版4）　27点出土した。すべての細形のもので長さ5.5cm・径1cm程を測る。I3—2区第4ピットからは19点がまとまって出土している。

砥石（図版4）　10数点出土した。長径5cm程で四面に研磨面を有する小形のものと、不定形多面体の大形のものがある。

紡錘車（図版4）　径7cm・厚さ1.5cm程の円形を呈し、中央に約1cmの孔を有す。軽石製。C4—1区出土。

ふいごの羽口（図版4）　10数点ある。出土地点には何か所かのまとまりが認められ、周辺からは鉱滓が出土している。

鉄製品（図版4）　20数点出土したが、遺存が不良で形態を明らかにし得ないものが多い。近世の遺物が混入している可能性もある。

3．中　世

（図版4右上）　口縁端部が水平に面を取って作られる珠洲焼の片口か擂鉢。内外面ロクロナデ。胎土は灰褐色を呈す。F3—4区出土。吉岡氏編年のⅣ期（1300～1400年）に類似する。(注9)

4．近世以降

遺構は土坑状のものと、幅の広い不定形のものなどがある。遺物はコンテナ2箱の陶磁器片と木片がある。これらの遺物は過半が遺構内から出土した。近世前半のものは少なく、大半は末期以降で、近現代のものと混在している。現在未整理である。

a　遺　構

平安時代の遺構と識別するため100番代の遺構番号を付した。土坑状のもの（SK101～107）は、A5～A7の直り山集落隣接地に集中する(第23図)。覆土はいずれも粘土質であるが、黒褐色砂を含み平安時代のものと異なる。明らかにⅢ層を切っているが、同層中では判然としないものが多い。遺物は雑多な木片類と陶磁器片が混って出土し、投棄されたものと想定される。多くは塵芥穴と思われるが、SK106のように杭を打っているものなど単なる塵芥穴と判断できないものもある。近世以降、現代までの年代幅を持つ。

不定形のものは、幅が広くⅣ層を数10cm掘り込む深さで、底部はいずれも平坦な点で共通する。覆土は青味がかった粘土で他と異なる。プランに共通性はないが、面的な広がりを持ち、幅の広い溝状のSX105～107も連続した方形区画とも見られる。遺物は少なく、総て陶磁器細片で、木片はない。むしろ混在する土師器・須恵器がまさる。近世以降の所産と思われるが、同時期に作られたものか明らかでない。耕作など生産に関するものと思われる。

また、確認調査ではＥ８・Ｄ９・Ｂ12の畑地水田境界部で、Ⅳ層に達する杭列が検出されている。この杭はＳＫ106と同じ形状をしており、近世以降と考えられる。

ｂ　遺　物

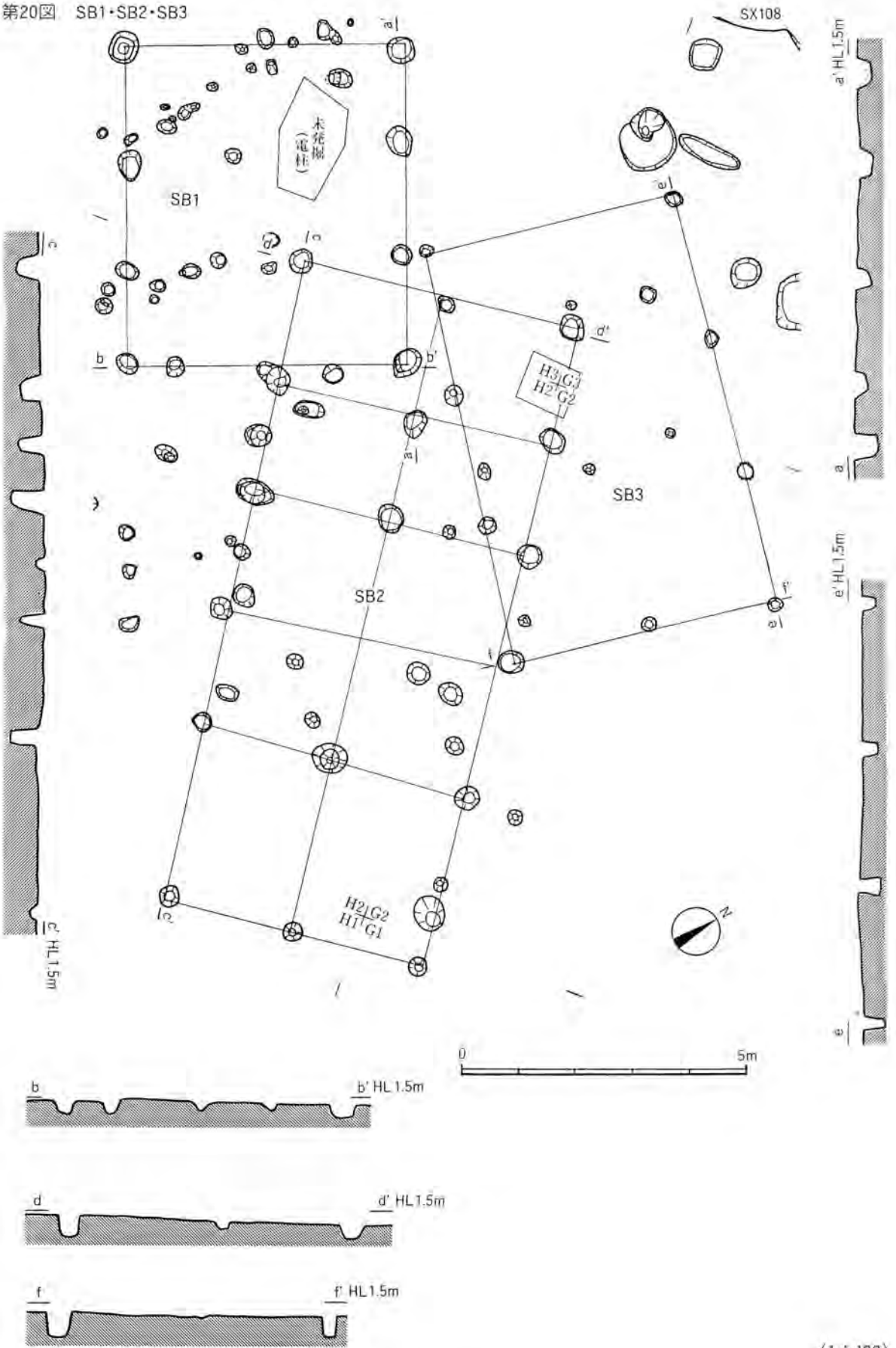
ＳＫ105から多くの遺物が出土した。その一部を第30図に示す。121・122は鉄釉の施された擂鉢。123・124はホーロク。素焼で底部は薄く、外面にススが付着する。125は染付け碗。2種の花文を交互に１対ずつ描き、唐草状につなぐ。126は内外面黒色の瓦器系鉢。外面は光沢をおび、内面にススが付着する。手焙りなど火鉢の類であろう。これらは近世末期以降のものと思われ、本遺跡陶磁類の多くはこれに類する時期である。このほか、排水路立合調査で得た近世前半の資料が若干ある。

Ⅴ　まとめ

本遺跡の縄文時代の資料は断片的であるが、遺跡が立地する砂丘の年代的評価の目安になり得る。また亀田砂丘後列全体でも今のところ同期まで溯る確実な資料はなく、同じことが言える。次に平安時代では、集落址南西側の主要部が明らかになった。遺構配置・遺物分布・層序などからこの集落がさらに南西に拡がる可能性は少ない。しかし反対の直り山集落側では、本調査区では最も優れた建物が２棟認められ、遺跡の中心地が東北側に拡がるのは確実である。集落址は、遺跡の立地する砂丘の地形に規制された細長い形をとって営まれたのであろう。集落址の年代は、ＳＥ７などのやや古い様相を持つものを別にすれば、概ね今池遺跡群で示された第Ⅵ期～第Ⅶ期前半期(注10)（９世紀後半～10世紀前半）に相当する。９世紀に出現し、比較的短期間で消失ないし衰退したと言える。遺物の中には、緑釉素地や黒色土器など県内では類例のないものが認められる。これらから広い交易性が窺えるが、これが本遺跡個有の特性なのか、遺跡群に伴う属性なのか明らかでない。いずれにしても、有利な地域的背景があったものと思われる。中世・近世以降については不明な点が多い。

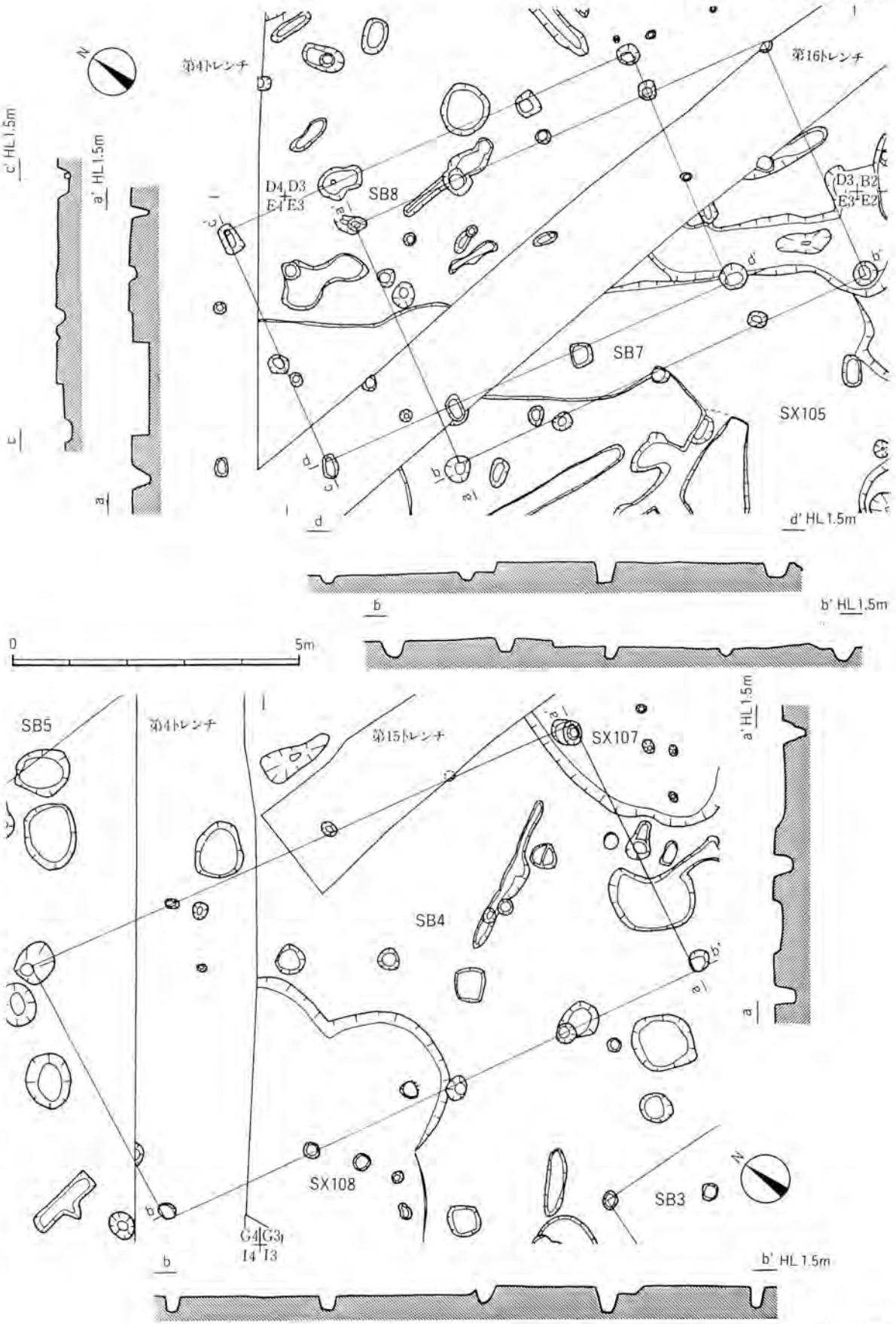
注１：藤塚明ほか　『新潟市小丸山遺跡・的場遺跡範囲等確認調査報告書』　新潟市教育委員会　1987
注２：新潟古砂丘グループ　「新潟砂丘と人類遺跡――新潟砂丘の形成史Ⅰ――」『第四紀研究』第13巻第２号　1974　（第１図は同文献を基に作成した。）
注３：酒井和男ほか　「亀田町周辺の遺跡調査について」『明窓』第４号　新潟東工業高校生徒会　1966
注４：酒井和男ほか　『大江山地区の遺跡』　新潟市教育委員会　1987
注５：柱間寸法は、柱根が遺存していたＳＢ12の調査から、必ずしも完数尺で割り切れる数値にはないとの所見を得たので、あえて尺で統一することは避けた。
注６：井戸は次の論考を参考にしたところが大きい。　宇野隆夫　「井戸考」『史林』第65巻第５号　1982
注７：奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿古代篇』　1985
注８：百瀬正恒　「平安時代の緑釉陶器――平安京近郊の生産窯について――」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会　1986
注９：吉岡康暢　「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」『庄内考古』第18号　1982
注10：坂井秀弥ほか　『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　新潟県教育委員会　1984
　　坂井秀弥ほか　『上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅱ』　新潟県教育委員会　1986

第20図　SB1・SB2・SB3



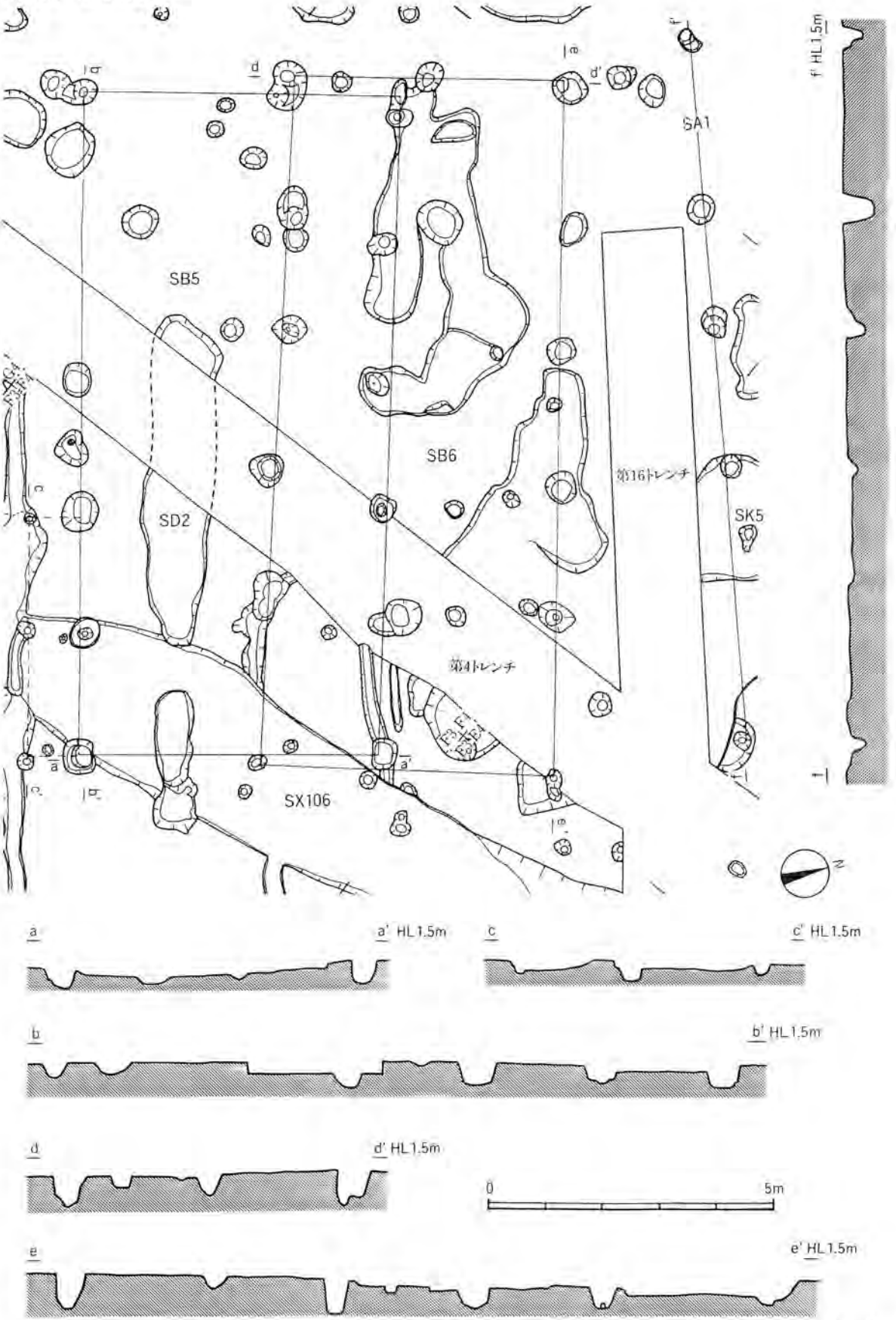
(1：100)

第21図　SB4・SB7・SB8



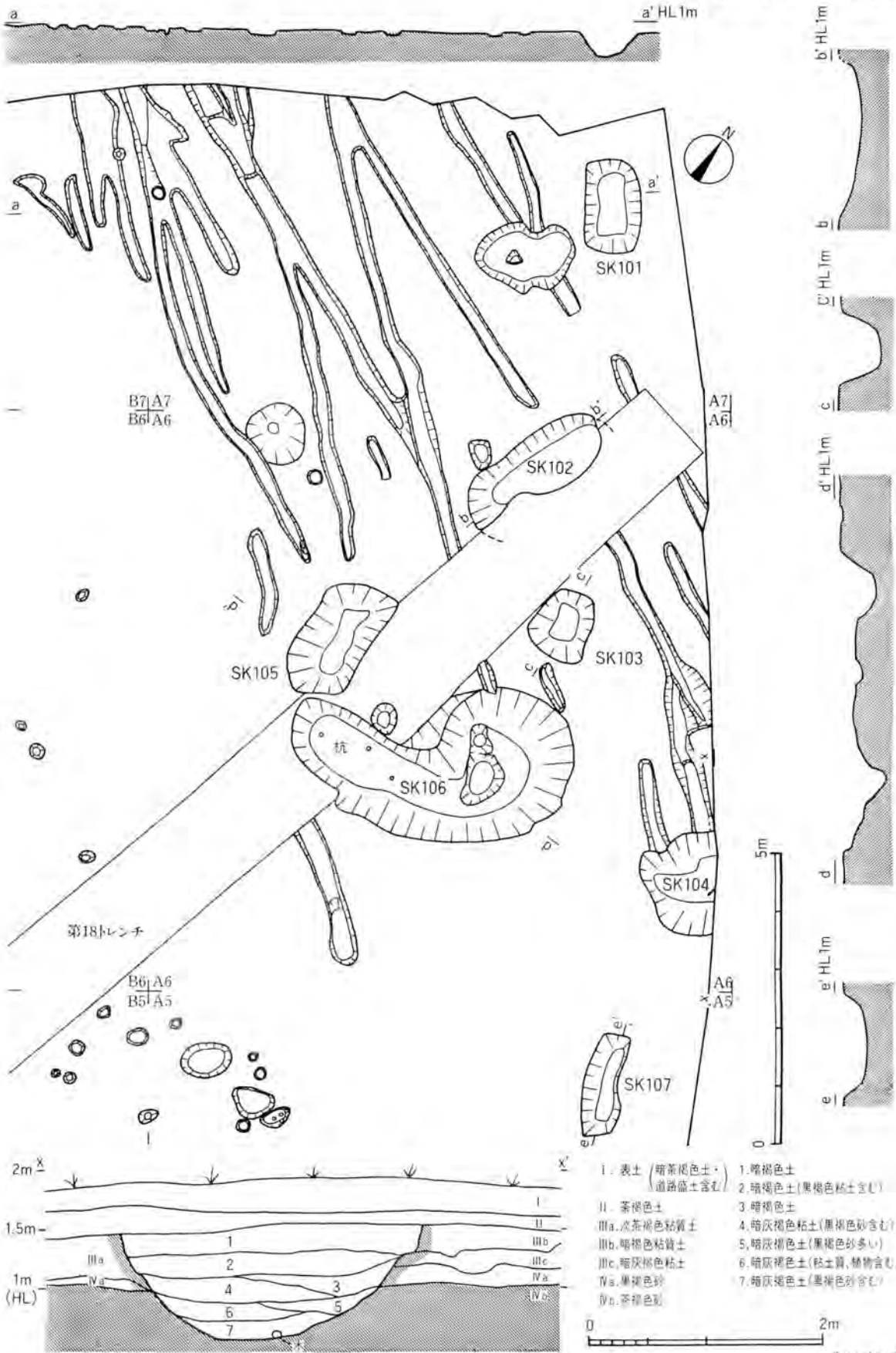
(1：100)

第22図　SB5・SB6

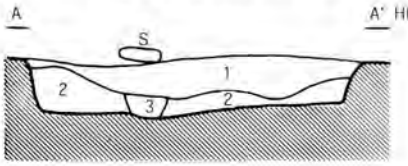


(1：100)

第23図　畝状小溝ほか

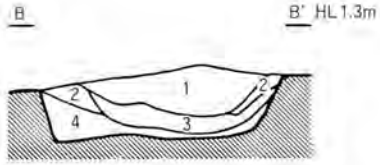

a
a' HL1m
b' HL1m
b
c' HL1m
c
d' HL1m
d
e' HL1m
e
N
SK101
SK102
SK103
SK104
SK105
SK106
SK107
杭
B7 A7
B6 A6
A7
A6
B6 A6
B5 A5
A6
A5
第18トレンチ
5m
0
2m
1.5m
1m
(HL)
1
2
3
4
5
6
7
Ⅲa
Ⅲb
Ⅲc
Ⅳa
Ⅳb
Ⅰ. 表土（暗茶褐色土・道路盛土含む）
Ⅱ. 茶褐色土
Ⅲa. 濃茶褐色粘質土
Ⅲb. 暗褐色粘質土
Ⅲc. 暗灰褐色粘土
Ⅳa. 黒褐色砂
Ⅳb. 茶褐色砂
1. 暗褐色土
2. 暗褐色土（黒褐色粘土含む）
3. 暗褐色土
4. 暗灰褐色粘土（黒褐色砂含む）
5. 暗灰褐色土（黒褐色砂多い）
6. 暗灰褐色土（粘土質、植物含む）
7. 暗灰褐色土（黒褐色砂含む）
0
2m
(1：100)

第24図　SB12・SD3・SD4セクションほか



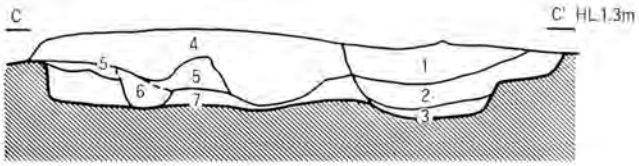
SD3B

1.黄灰色粘土(硬)　炭化物、遺物含む
2.灰褐色砂　粘土含む、シミを持つ
3.1層2層ブロック状混在層
(S-礫は投影)



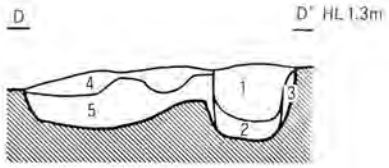
SD3A

1.灰褐色粘土　炭化物含む
2.黒褐色砂　粘土ブロック含む
3.青灰褐色粘土　炭化物含む
4.暗褐色砂　(基盤層とあいまい)



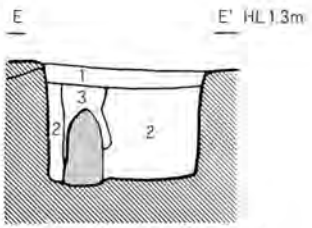
SD4B

1.灰褐色粘土(明るい、硬)　遺物炭化物含む
2.灰褐色砂(暗い)　粘土炭化物含む
3.灰褐色砂
4.灰褐色粘土(硬)　遺物炭化物含む
5.灰褐色粘土　砂含む
6.黒褐色砂　粘土ブロック含む
7.灰褐色砂　粘土含む
8.暗褐色砂



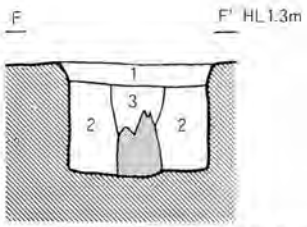
SD4B

1.黄灰色粘土(硬)　炭化物含む
2.暗褐色砂　1層の粘土多く含む
3.黒褐色砂　1層の粘土を含む
4.黄灰色粘土　黒褐色砂含む
5.黒褐色砂　上部では4層の粘土を
ブロック状に含む
基盤層とあいまい



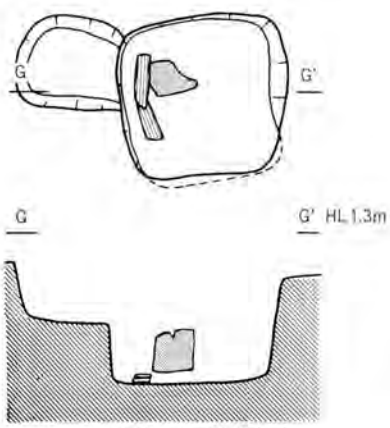
SB12南側柱列西第4柱穴

1.灰褐色粘土
2.青灰色砂、黒褐色砂混層　横縞状に堆積
3.暗褐色土　粘性あり、炭化物含む

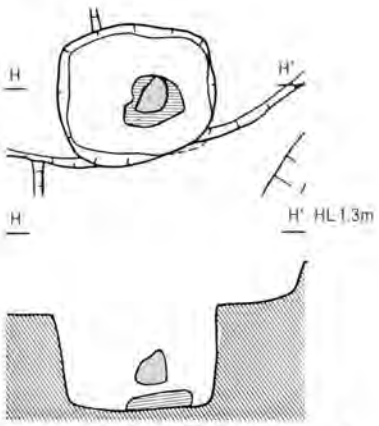


SB12南側柱列西第5柱穴

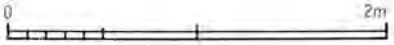
1.灰褐色粘土
2.青灰色砂、黒褐色砂混層　縞状に堆積
3.暗褐色土　粘性あり、炭化物含む



SB12南側柱列西第2柱穴



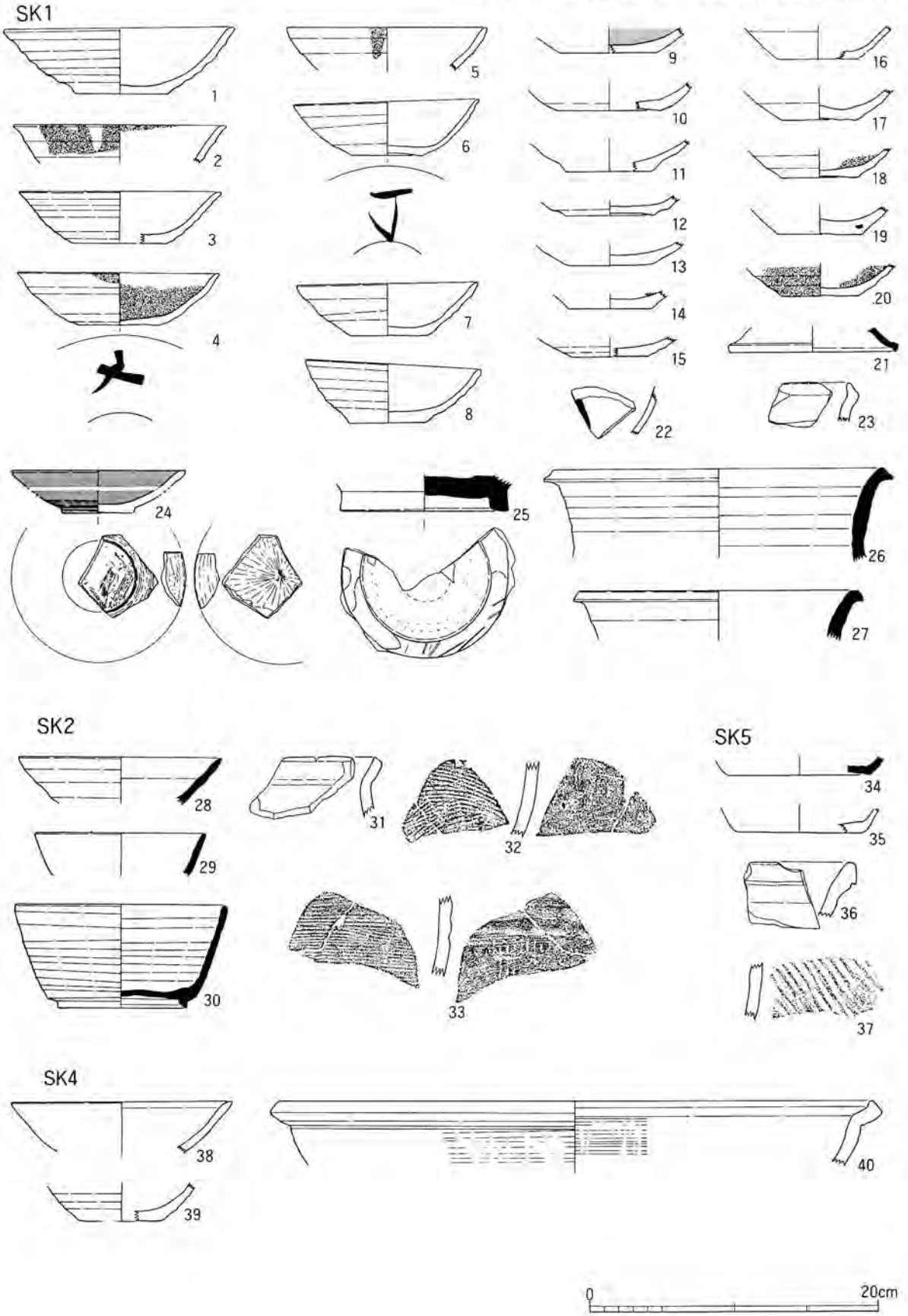
SB12北入側柱列西第5柱穴



(1：40)

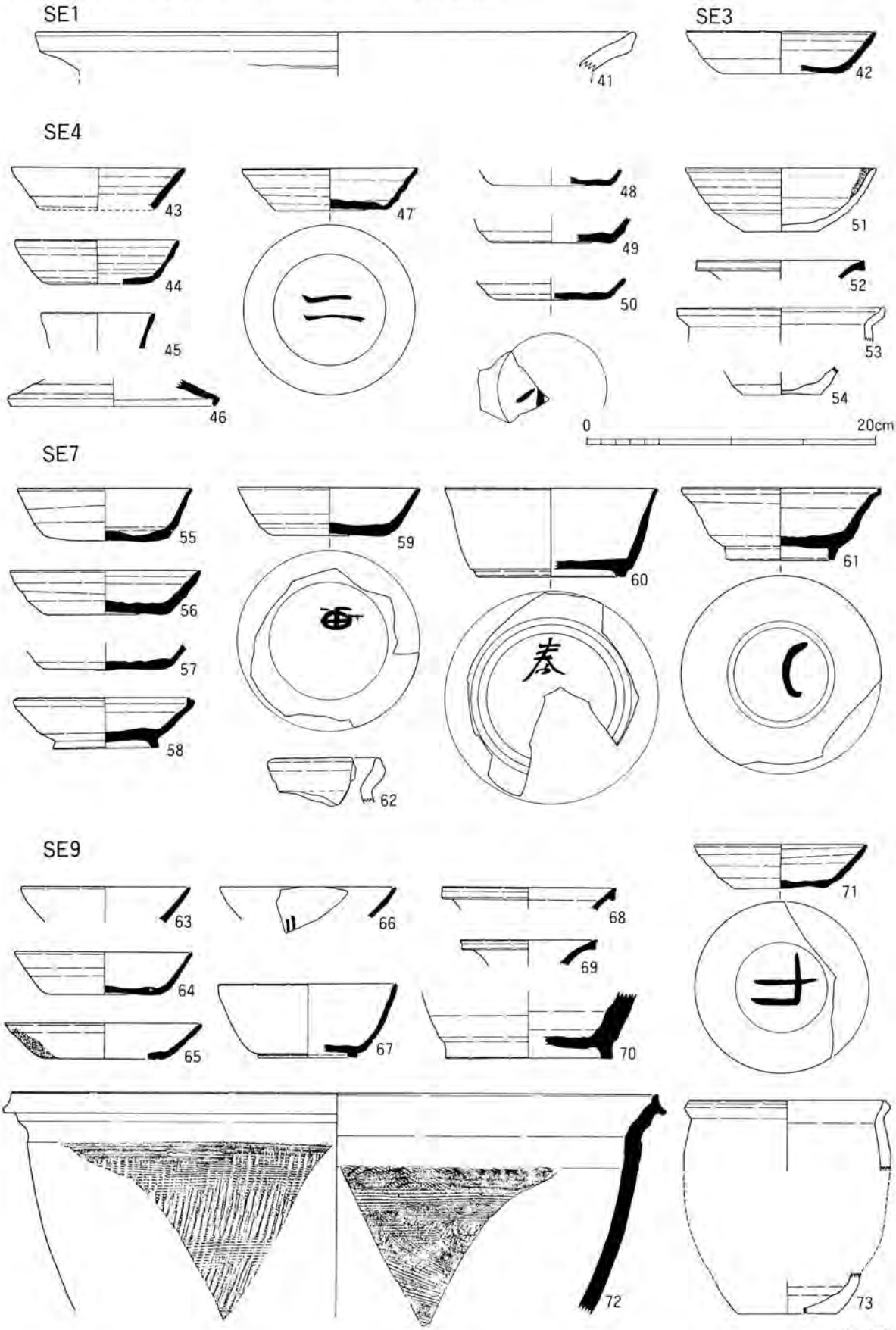
第25図　SB9・SB10・SB11・SB12ほか

第26図　平安時代遺物2（SK1・SK2・SK4・SK5出土土器）

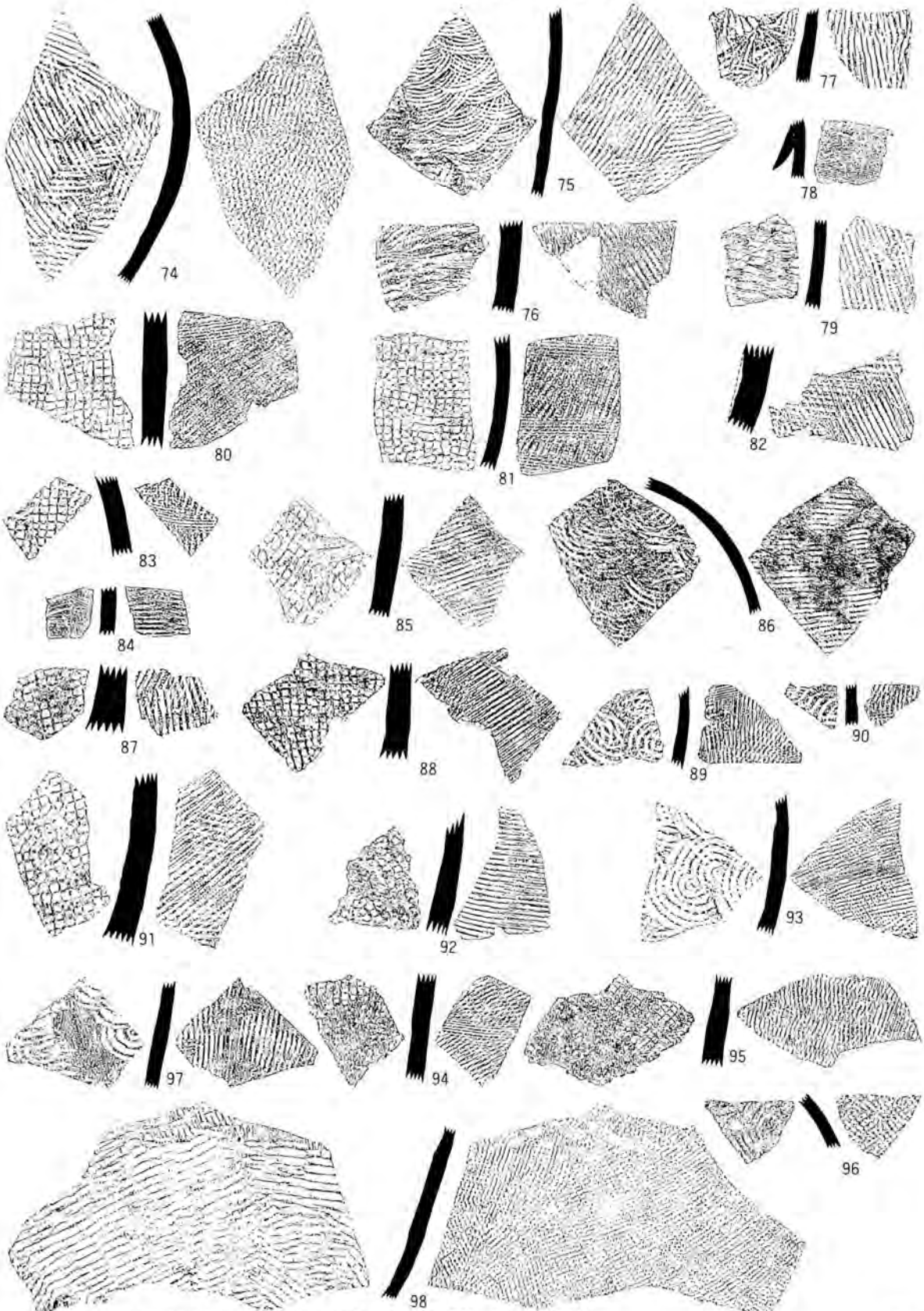


（1：4）

第27図　平安時代遺物3（SE1・SE3・SE4・SE7・SE9出土土器）



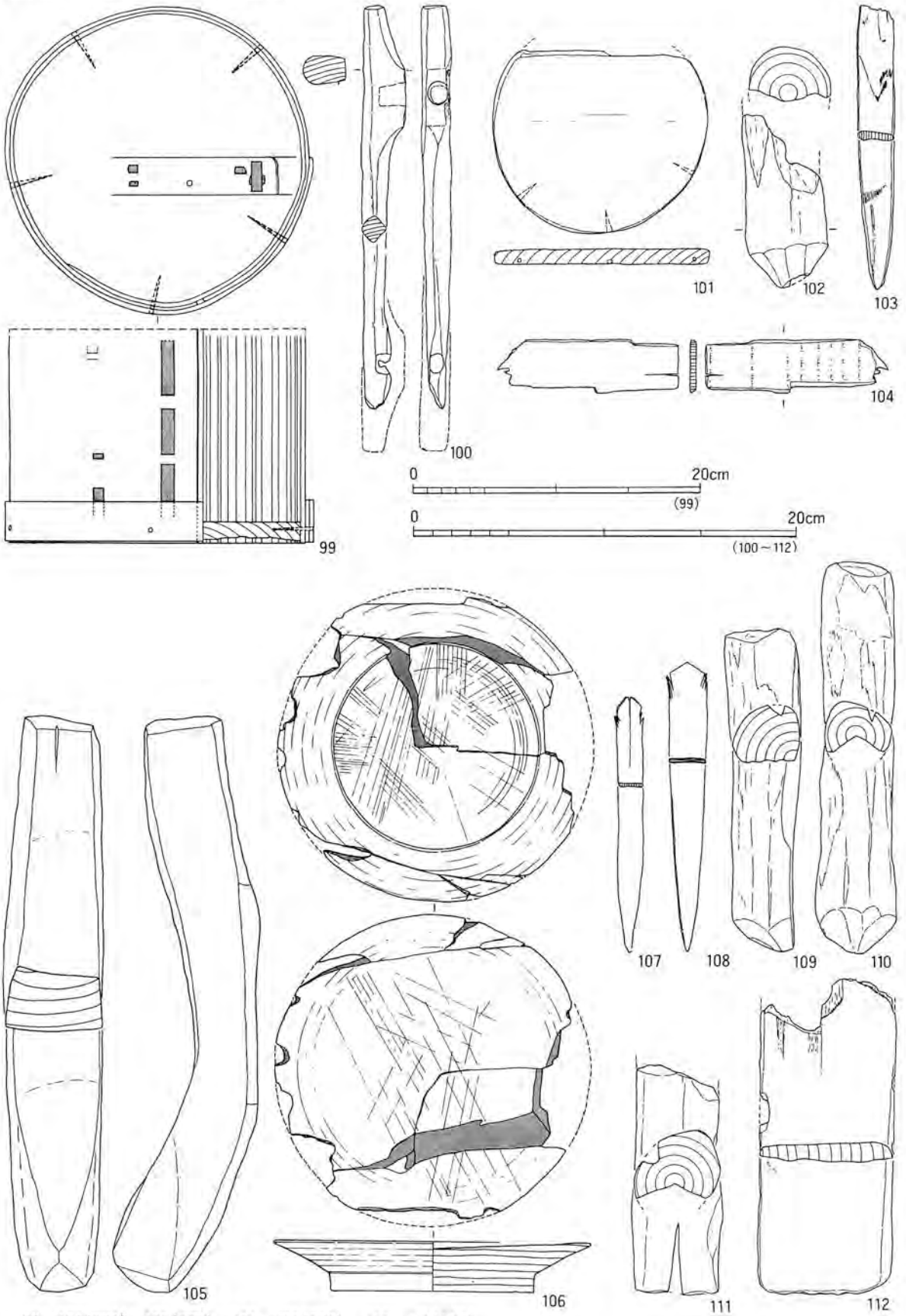
第28図　平安時代遺物4（土坑・井戸出土須恵器拓影）



74～79(SK1)　80～83(SK2)　84(SK4)　85(SK5)　86(SE2)　87～89(SE4)
90(SE5)　91～96(SE7)　97～98(SE9)

(1：4)

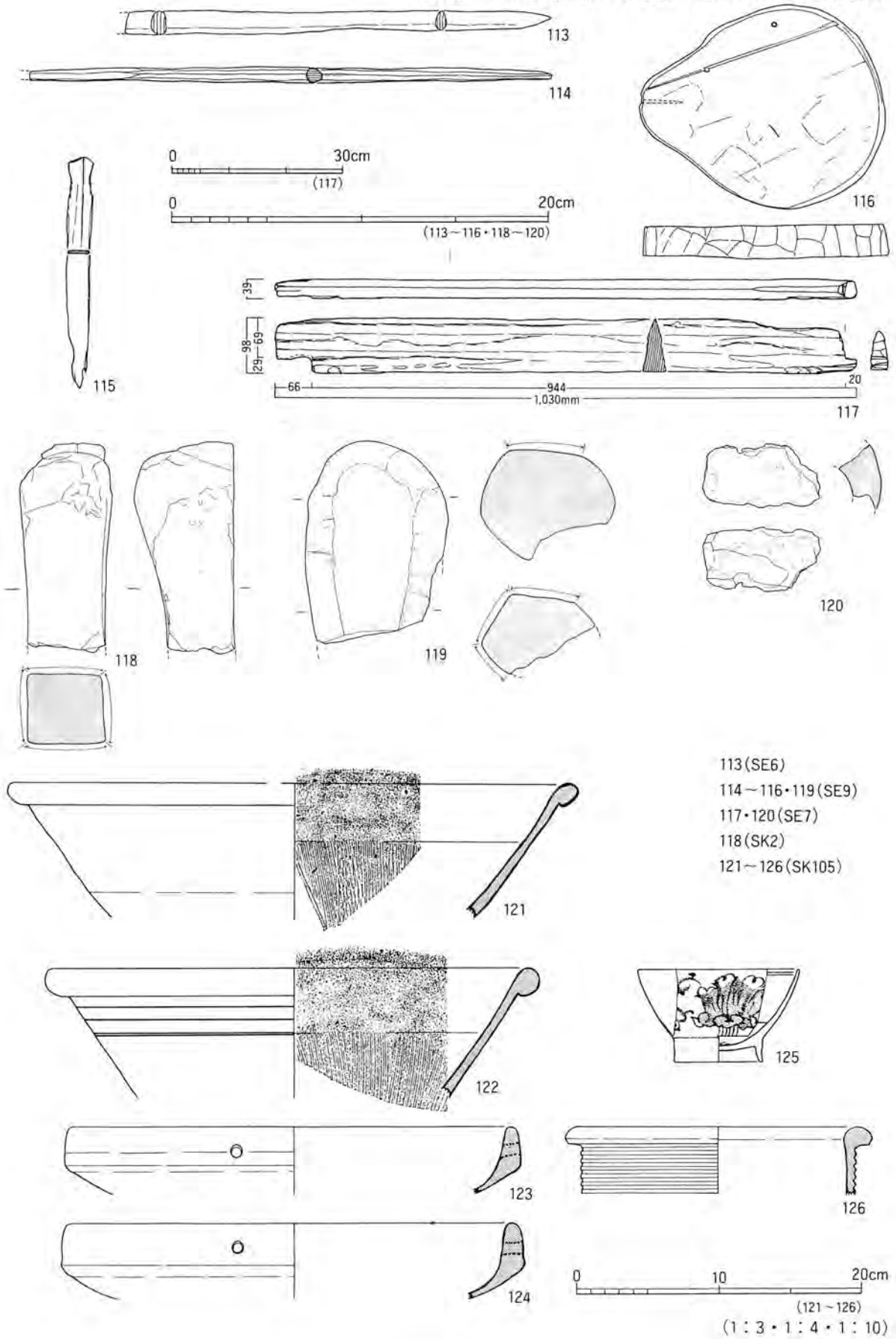
第29図　平安時代遺物5（木製品）



99～104(SK1)　105(SE1)　106～108(SE3)　109～112(SE4)

(1：3・1：4)

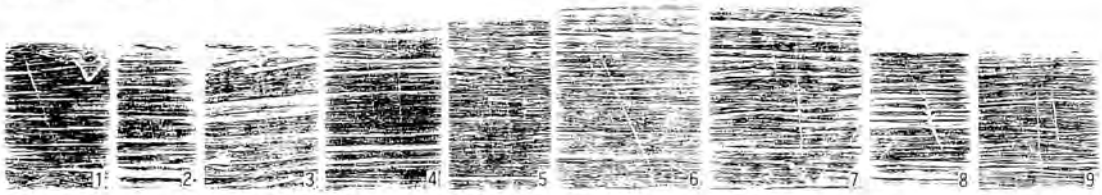
第30図　平安時代遺物6（木製品・砥石・羽口）・近世遺物



113(SE6)
114～116・119(SE9)
117・120(SE7)
118(SK2)
121～126(SK105)

(1：3・1：4・1：10)

第31図　SE9井戸枠



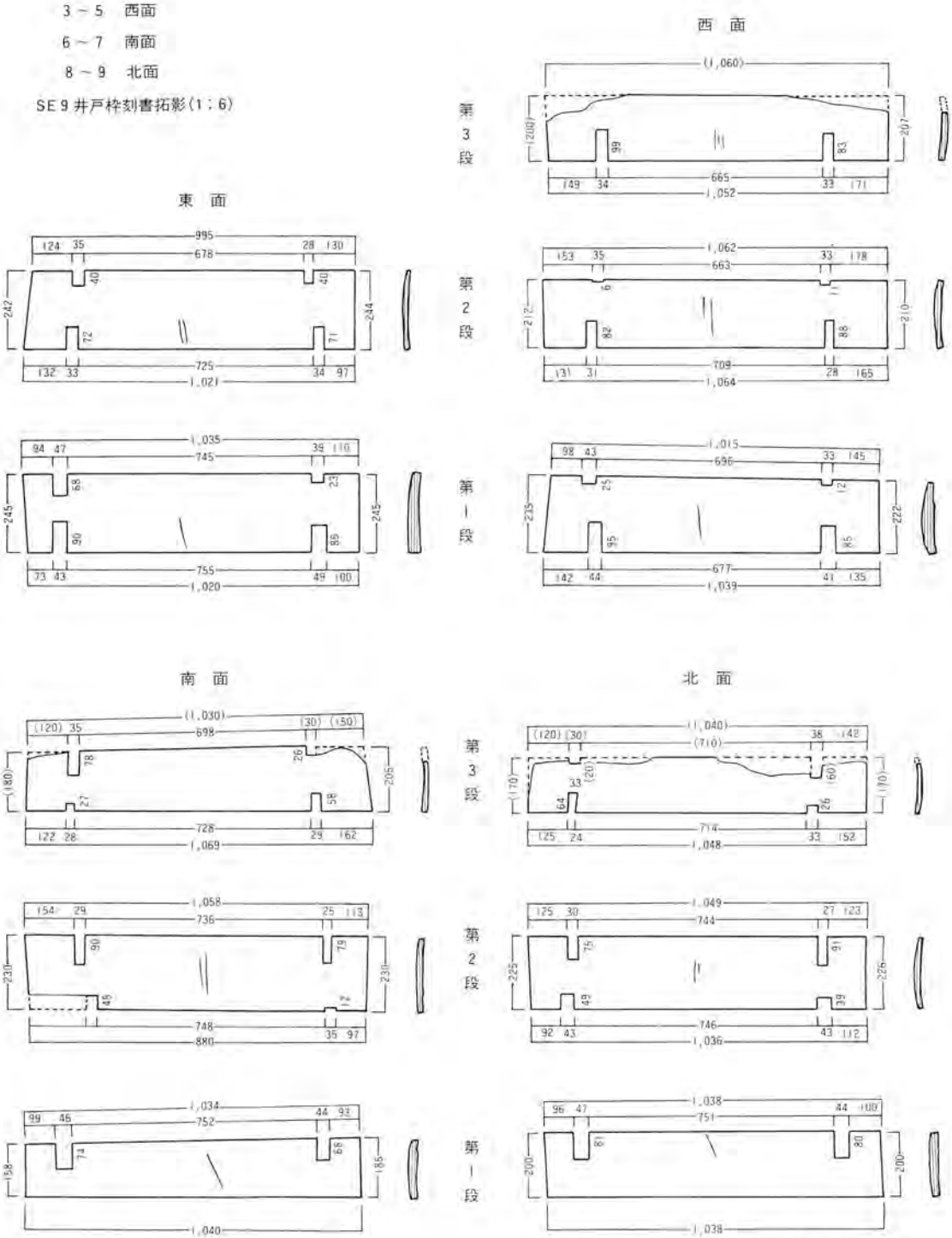
1 ～ 2　東面

3 ～ 5　西面

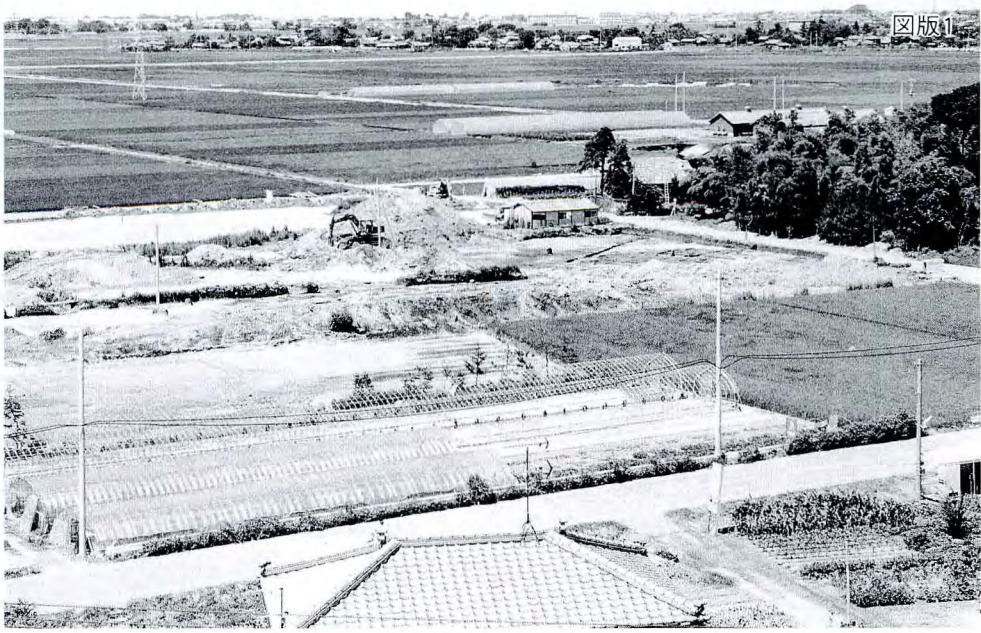
6 ～ 7　南面

8 ～ 9　北面

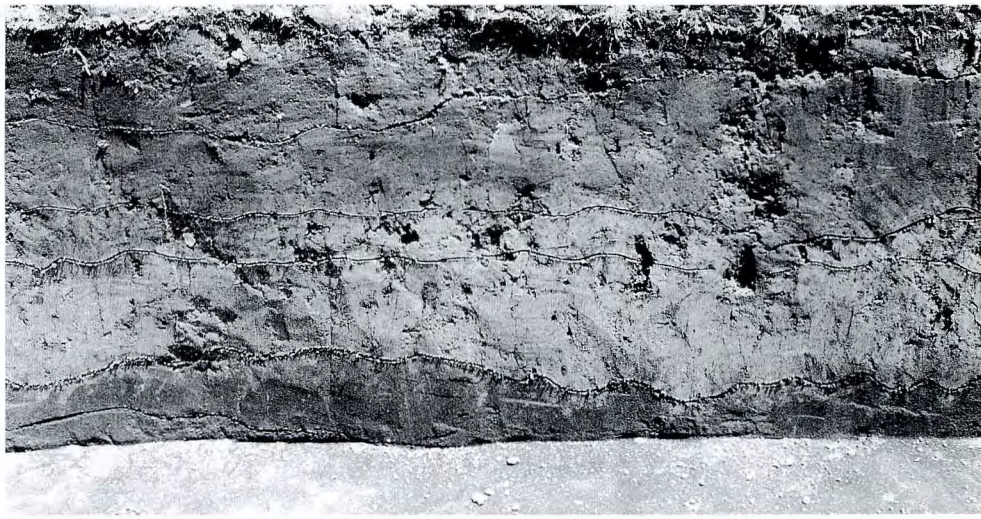
SE 9 井戸枠刻書拓影(1：6)



単位：mm(1：20)



遺跡遠景(南から)
1986年8月



基本層序
A7東壁

調査区の景観1
A3～I3
(南西から)

図版2

調査区の景観2
A3～A6・B3～B6
（北西から）

SB1・SB2・SB3
（南東から）

SB11A・SB11B・SD3
（北西から）

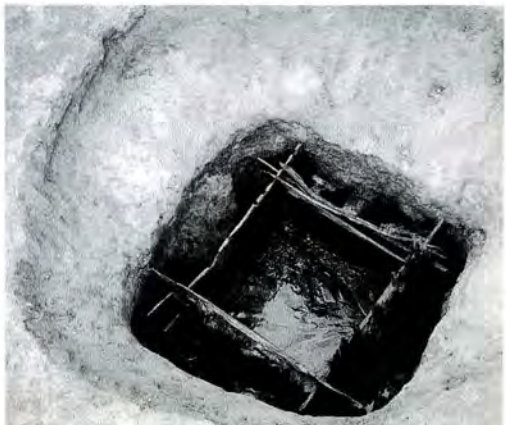
SB12・SD4
（北西から）

左
SB12南側柱列
西第5柱穴

右
SB12北入側柱列
西第3柱穴

左
SE5（南から）

右
SE7遺物出土
状態（南東から）



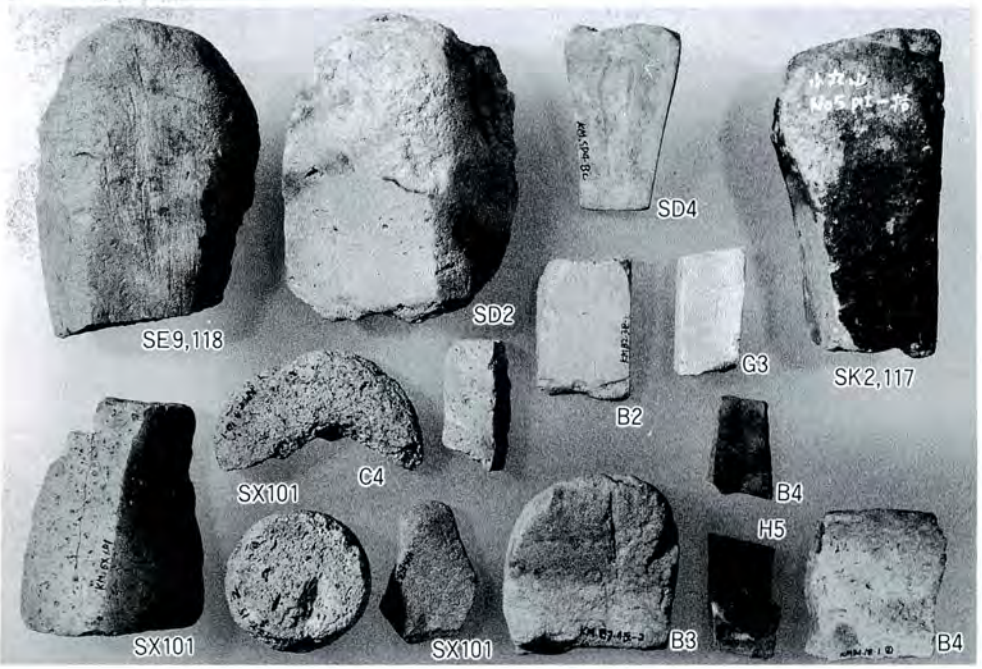
左
SE9上面

右
SE9井戸枠検出
状態

（共に南から）

図版4

1　石斧
2～6　縄文土器
F3グリッド　中世陶器



砥石ほか

上2段　羽口
下2段　鉄製品

土錘
上段・下段左6点
I3グリッド 第4ピット
下段中6点 G5グリッド
下段右端 A4グリッド

1

6

24

7

51

30

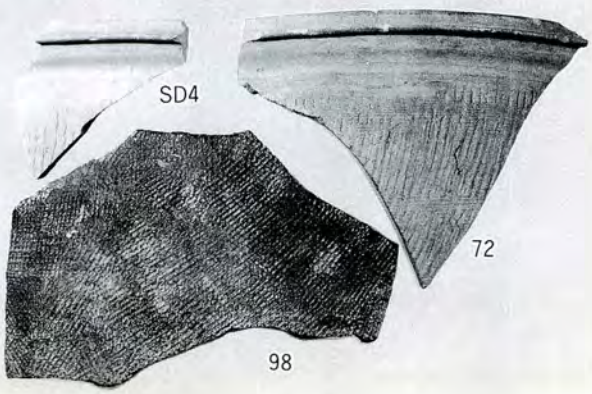
47

56

60

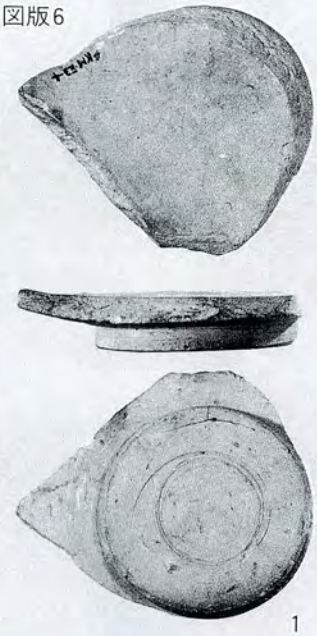
61

55



72
98

71


1

4

3

7

6

5

10

C3

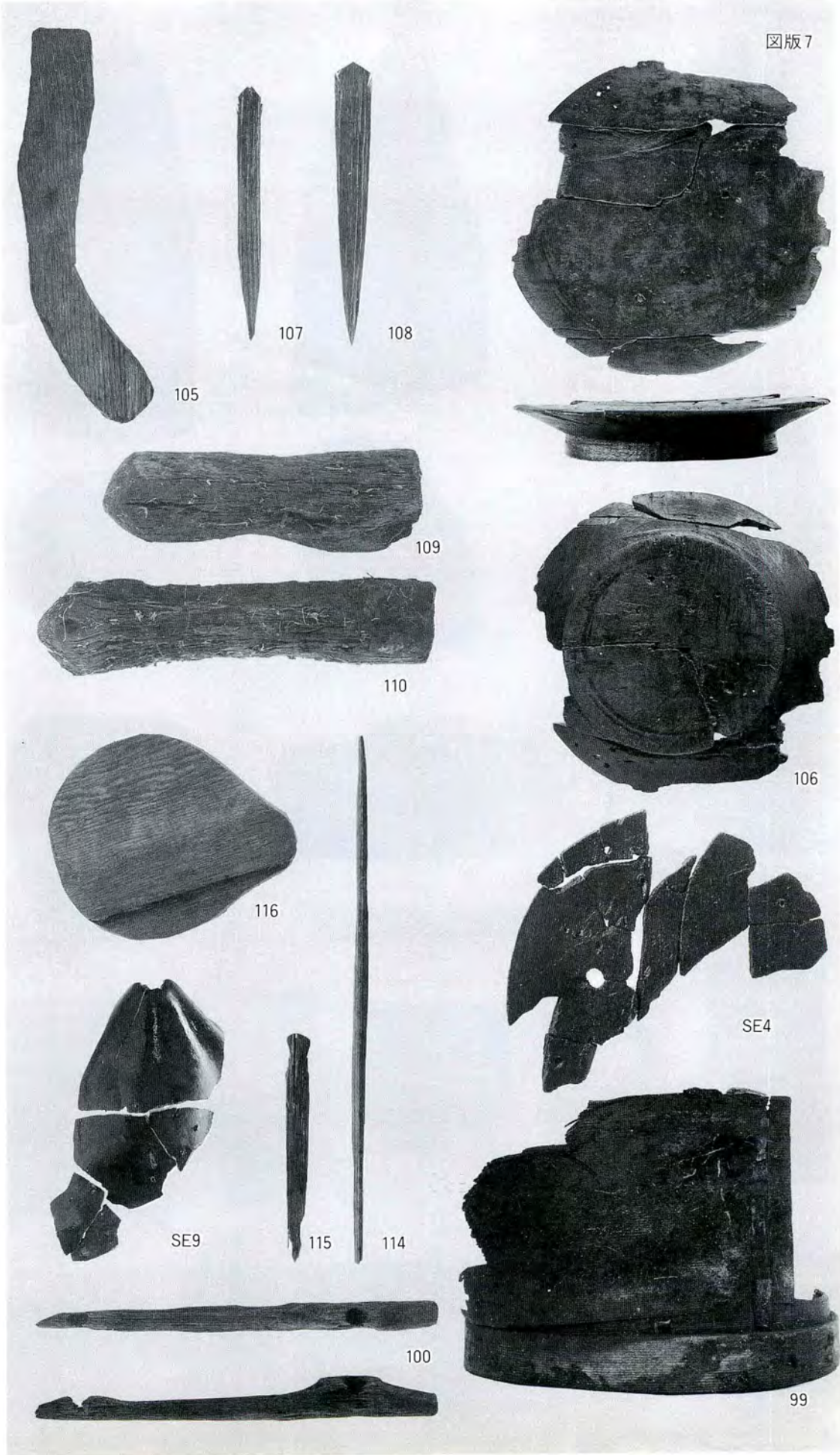
B3

2

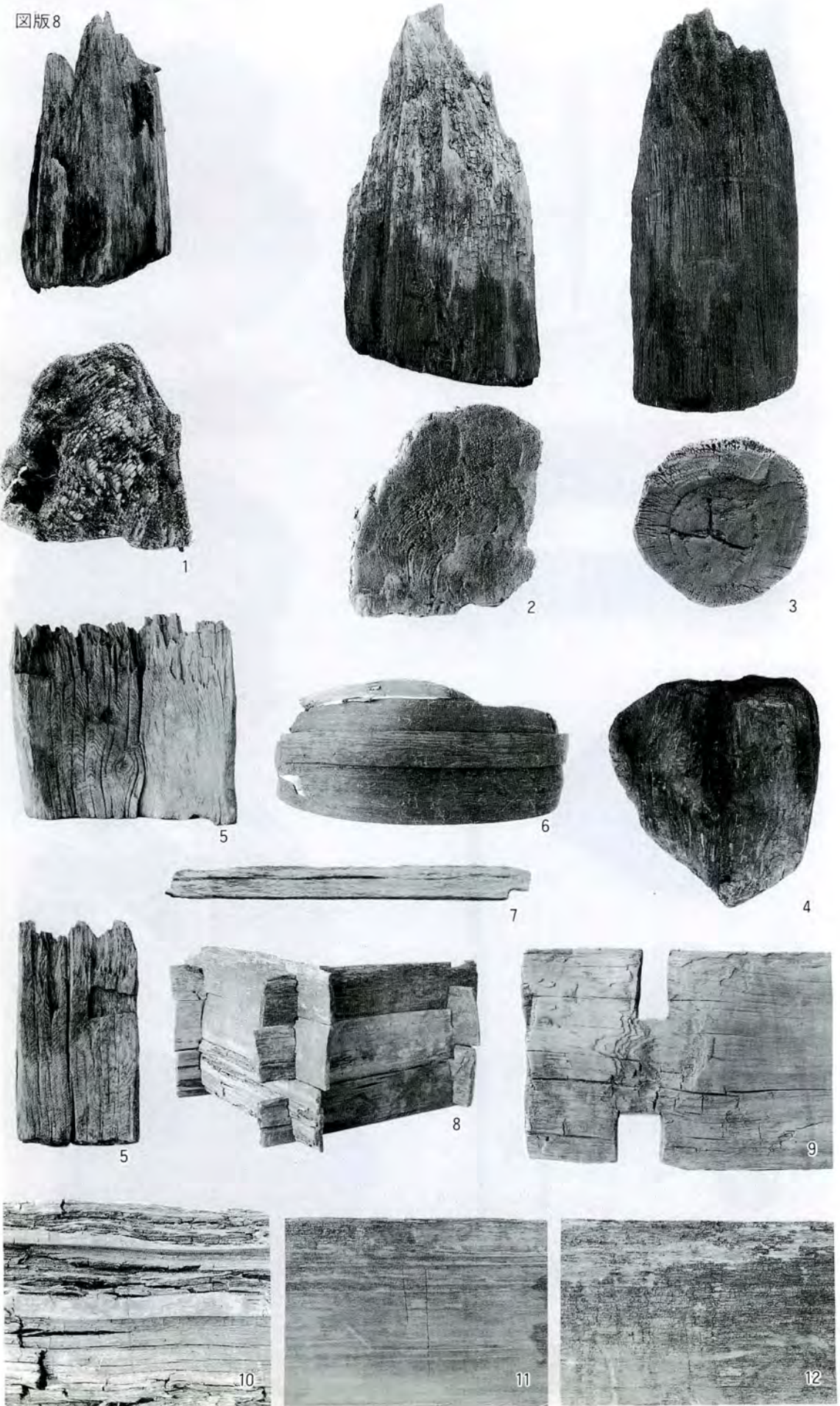
SD2

SD3

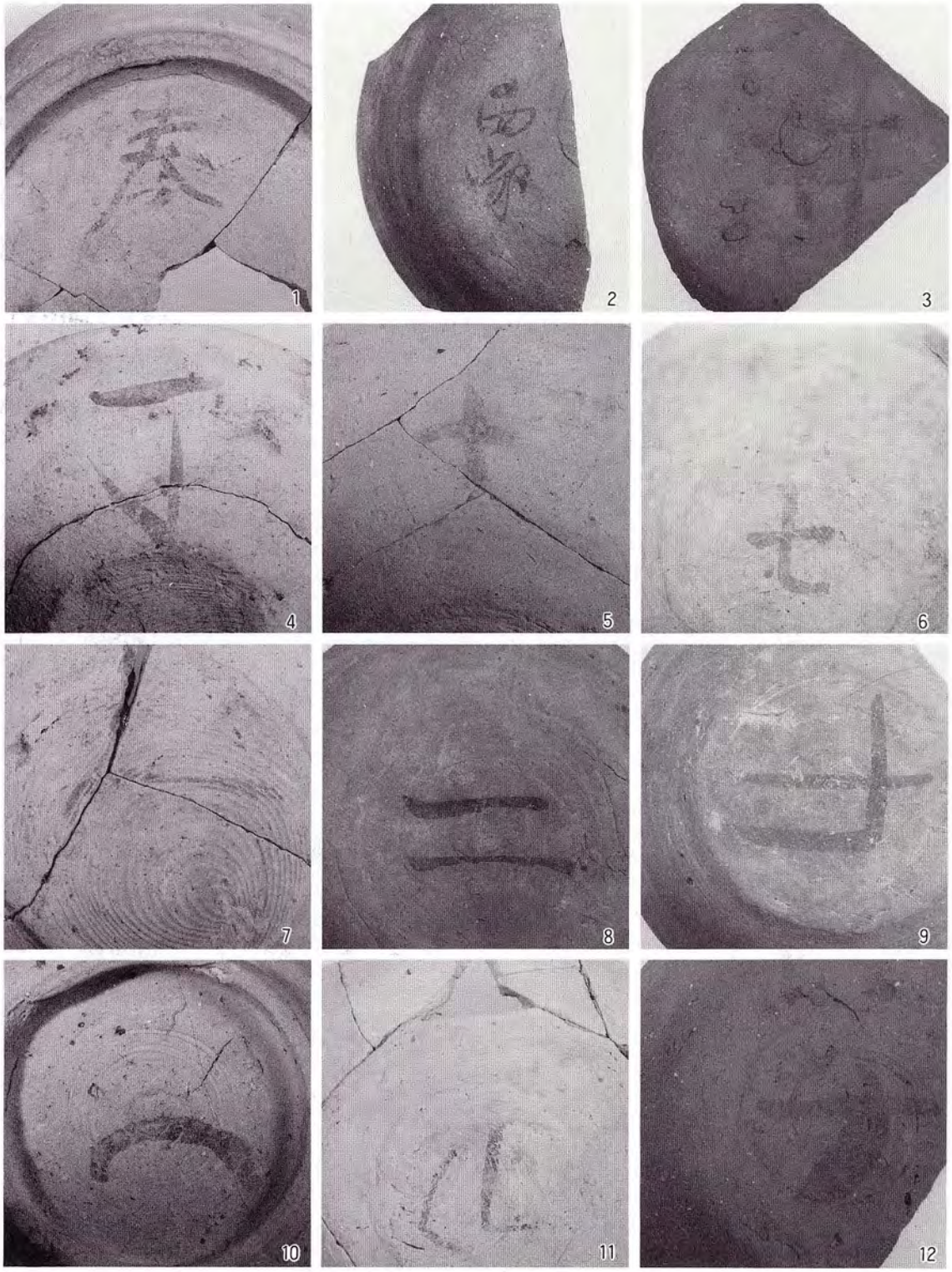
SD4


105
107
108
109
110
106
116
SE4
SE9
115
114
100
99

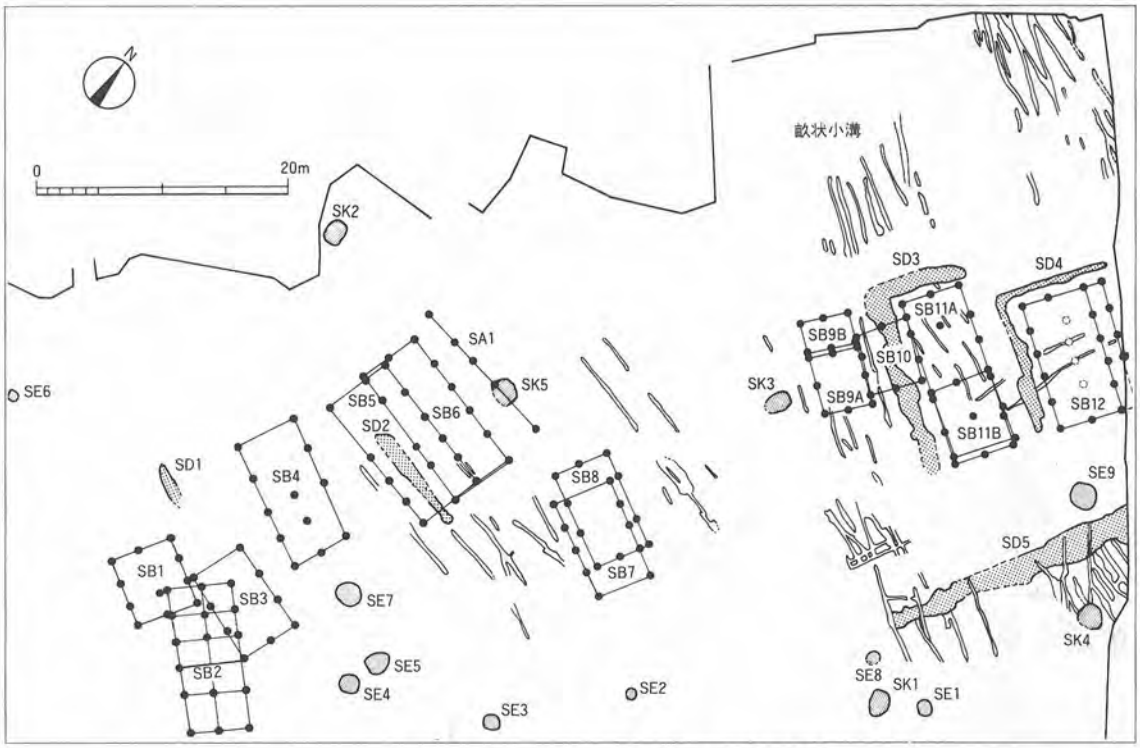
図版8



木製品2



墨書土器　1. SE7(60)　2. F5—4区　3. H2　4. SK1(6)
5. SD4　6. SB11A北側柱列西第2柱穴　7. SD2
8. SE4(47)　9. SE9(71)　10. SE7(61)　11. SD4　12. SD3



第32図　平安時代遺構配置図（1：600）

図版8　1．SB11B北側柱列西第2柱根　2．SB12北入側柱列西第2柱根
3．SB12南側柱列西第5柱根　4．SB12北入側柱列西第3柱礎板
5．SE2井戸枠(一部)　6．SE5水溜(曲物)　7．SE7井戸枠？(117)
8．SE9井戸枠　9．SE9井戸枠外面(部分)　10．SE9井戸枠(刻書Ⅰ部分)
11．SE9井戸枠(刻書Ⅱ部分)　12．SE9井戸枠(刻書Ⅲ部分)

新潟市小丸山遺跡発掘調査概報

発行日　1987年3月31日（非売品）
発　行　新潟市教育委員会
新潟市一番堀通町3番地12
〒951　TEL.(025)228-1000
印　刷　太陽印刷所
新潟市白山浦一丁目613番地
〒951　TEL.(025)265-3101

付図　小丸山遺跡遺構全測図